らるゝ樣子は灑々落々たるものである。併し醍醐味の毒藥、笑中に刀を藏して學人の心根を兩斷するの一事あるや否やは自ら別問題である。

師は若狹の國に生れ、七歲にして出家し、土地の專門學校に學を修め、後に發奮して一杖一笠、行雲流水の客となり、泉州境市なる興國寺に渡邊實雄師を訪ねて茶禪飯禪の修養を重ぬること數年、笈を負ふて東都大學林に入り、卒業後實參實究に志し て、洞門に正師を探り、終に先般遷化された星見天海老漢に願ひ出た、師はこの事に就て語らるゝやう。

「人に云はるゝまゝ兎に角願書を出すと果して却下された、自分の如な老僧は大學などを出た人の世話をする譯にゆかぬ云ふたそうぢやが、一旦思ひつめたので何とかして相見したいと思ふて居た矢先、永平寺の大遠忌があつて、西堂寮に老師が居ると聞て訪ねた。すると御自分から戶を排して室外に出られ「衲も今は隨身の者の世話になつて居る身ぢや、とても人の世話は出來ぬ」と戶を閉められた、其後是非一度は參得したいと考へて遙々越後に參り、漸く其助化先で百日間接得を受くることが出來た」

と、以て如何に老師の求道の至誠が熱烈であつたか知ることが出來やう。晩年に至り濟家の禪風を窺ふべく洛陽に錫を飛して妙心寺管長豐田毒湛禪師の室中に參じ、證上の修を打すること茲に三星霜。將に大事を了じて更に悟後の修行をと志さるゝ折柄、宗命默し難く、明治四十四年以來曹洞宗大學に教鞭を執る事になつた。將來師の自坊なる千葉縣長安寺を一大叢林として開單すべく、目下其準備中である。洞濟の長所を以て成立する僧堂裡の風光は、定めし天下の耳目を聳動する事であらう。

白樂天を歸服せしめた道林和尙

深々たる處は佛眼も窺ひ難く、密々たる處は魔外も測ること莫し、古人の一擧手一投足、よしや奇を弄し群を驚かすものありとは謂へ吾人は之に對して是非の言を挿

む事を欲しない。

往昔、支那の道林和尚の如きは其一人である。只是れ安樂の法門たるべき兀然端坐を、所もあらうに森々たる喬樹の上、幾十尺を登りつめては鳥の巣のよう、悠然として時々眺むる下界の有象無象。處へやつて來たのは新に當縣の知事に任ぜられた白樂天。「和尚は何處に」と案内を乞へば、樹の上につくねんとして坐睡をやつて居る、覺えず「和尚危い！」と聲をかけた。聲に應じて「貴公こそ危い！」と下を望んで叫ばれた。

若し殺を論ぜば一毫を傷らず、若し活を論ぜば喪身失命の作略は、詩文に於てこそ支那四百餘州肩を等うするものなき白樂天も、恰も猿の影を捉ふるが如く更に會する事は不可能であつた。

樹上に在て坐睡をするよりも、地上の人こそ却つて危いとは、道林和尚にして初めて謂ひ得る名言である。和尚は爲めに鳥巣禪師の別名を得た位、樹上の風月は蓋し和尚の別天地であつた。白樂天との對話に似た面白い話がある。

屋根屋と疊屋と同じ家に仕事をして居た。屋根屋は上に疊屋は下に互に精出して居る矢先、疊屋が突然下から聲張り上げて「同じ職人同志でも、お前の樣に危い處で藝當するのは危險なものだ」と云へば、屋根屋も負けては居ない「何を云ひなさる、昔から屋根の上で死んだものはないが、疊の上では幾干死んだか分らぬぞ」と意氣軒昂。實に高いところよりも低い所の方が危い。

白樂天果して道林和尚が千聖不傳底の活作略を會せりや否や。更に樹上を仰ぎ見て「如何なるか是れ佛法的々の大意」と問うた。禪師答へて「諸惡莫作、衆善奉行」と、恰も動ずれば則ち影現ずるが如く無造作な一言、元來大詩人の白樂天これでは滿足しない。「斯ることは三歳の童子も知つて居る」とやつた。成程、諸〻の惡をするな善を行せよと云ふ事位は誰でも知つて居る、佛敎の第一義諦、玄妙不可思議の法門を聞かせて呉れと、冷笑半分に問ひ返せば、禪師言下に聲を勵まして「三歳の童子之を知る

は易しと雖も、八十の老翁も之を行ふは難し」。凜たる一言に白樂天總身冷汗を覺えて退身三歩、遙かに樹上を仰いで三拜、終に道林和尚を師として佛敎の堂奥に歸入したと云ふ事である。

世人動もすれば奴を認めて郎となし、徒らに拂拳棒喝を行ずるを以て禪の眞面目なるかの如く誤解する者あるは、敎界のため痛歎の至りに堪えぬ。佛法元來別物ではない、喫茶喫飯、日常たゞ身に之を行ずるに於て初めて活潑々地の機用を現出する事を得るのである。之を行ずるの道他なし、「諸惡莫作、衆善奉行」我國に於ては聖德太子の御遺言がこれである。尊いお言葉ではないか。

筆と舌の咄堂居士

所謂新時代の思潮かぶれをした人間は、兎角生半可通の學問中毒に罹つて、ヒヨロ〳〵然たる神經衰弱の連中に充されて居る世の中である。月並句調で云ふならば、風のまに〳〵漂ふて處定めぬ捨小舟だ、無論主義もなければ節操もない、而も彼等の神經は强度の刺擊でなくては感ぜぬ程、それ程鈍くなつて居る。最早今日では文筆のみの世の中ではない、單行本でも雜誌でも自己の思想を傳へやうとするには、初號活字で膽つ玉のヒックリ返るやうな奇拔な標題で釣り込まねば、讀んで貰へぬやうな有樣である。天下の大勢を導くには何うしても言論の力でなくてはならぬ。數萬の群衆を統一し駕御するには黑豆を連ねた活字の力は用をなさぬ、乍併、言論は一時の力である。之を永久に傳へるには矢張筆の力である。

佛敎界の雄辯家を通じて先づ第一に指を屈するは咄堂居士である。居士が壇上の人として公衆の渴仰を一身に聚め、其博識を布演せられてより將に二十年、歷史の淺い我雄辯界には忘るべからざる大恩人である。隨つて整然たる論理、巧妙なる譬喩は氏一流の模聲、假聲と相待つて滿堂の聽者は爲に心醉せざるものはない。居士の壇上に顯はるゝや如何に周到なる用意と深刻なる注意とを拂つて聽者に臨まるゝかは、一度

其雄辯に接する者の等しく認め得るところてあらう、けれどもそは皮相の見解てあつて、眞の面目には甚だ遠い觀察てある。居士の辯舌は單に一片の技巧のみではない、其中心を貫くものは多年修練せる禪の力てある、膽田の修養てある。七縱八横の活作略、或時は放行、或時は把住、順逆波瀾の妙に至つては赤旛の下清風を起す。其筆の力に於て敎界第一人と稱せらる迄、今日の成功を見るに至りしも蓋し此力に外ならぬのてある。

常に數千名の聽者を對手として、大演說に渴仰せられ、等身の著書に我が讀書界を震動せしめつゝある居士は、書齋の人として亦去り難き印象を與へらるゝのてある。氏の邸宅は鳥の啼く音も長閑なる府下代々木の里、清洒たる書齋の一室に積み成せる幾千卷、和漢洋の書架を背にして机に凭れつゝ、如何に繁忙の間にも客あれば喜び迎へて快談數刻、如何なる人と雖も聊かの懸隔なく、春の如き溫雅の態度、これやがて幾千の聽衆に大なる感化を與へる氏の人格の清高なる所以。其一例として思ひ出さるるは簡素を旨とする氏の身邊に近來不似合なる金時計燦として光を放つ、これ先年神戸市に於て篤志者の爲に贈られしものなりと。氏に當時の自記あり、曰く

「旅ながら假の宿りに行李を整ふ。傍に貞永氏あり、予の時計を見て、あまり立派ならじ、失禮ながら予の持ち古したると交換せんと云ふ、見れば氏のは燦たる金時計、予のは今時の職工も持つまじき片側銀時計、交換とは名のみ、其實は貰ふも同じこと、予は再三再四固辭したれど、氏來年は還曆なれば其紀念として進上したし强ひて受よと迫る。辭すれども肯かず、終に予は生れて初めて金時計の持主となりぬ」

と、以て氏の德望の一端を知るに足るのてある。

三昧を會得せる又十郎

禪語に「三昧」と云ふ言葉がある、換言すれば「そのものに成りきる」と云ふ事だ、

茶の湯生花の末技すら、其堂奥に達するには全く三昧の境に到らねばならぬ。況して殺活を司る劍道の極意に於ては是非共此間の消息を了解し、身心に體得する必要があるのだ。

往昔、柳生又十郎フトした若氣の過より、遂に父但馬守から勘當を蒙つた。何か一つの功を立てねば歸參を許されない。柳生家は代々德川將軍の劍道指南役の家柄、隨つて又十郎も劍道の達人となつて歸參したいと考へ、一念發起して遙々二荒山に登つて、彼の有名なる伴藏先生の門を叩き、從前の一伍一什を懺悔して「希くは今後專ら劍道を勵み、其奥儀に達して父上に勘氣赦免を願ひ出る覺悟、何卒貴翁の弟子にして心膽を錬磨し、劍道の妙處を傳授下さるやう、只管にお願ひ申す」と、赤心面に顯れて入門を賴んだ。

伴藏先生初めは至極輕く相手になつて居たが「一體劍と云ふものは、凡そ何年位かゝつたら其奥儀を極められませう」との問に「左樣サ、何事も一生涯の仕事だ」又十郎意外の面付「生涯の仕事と仰しやつては、私の如き勘氣を蒙つて居る身は誠に心細い次第、本氣になつて修業したら何年位で出來ませう」「さうぢや、まあ十年位かな」「左樣で御座いますか、私も年老つた兩親を控へて居りますので、早く歸參して不孝の罪を詫びたいと思ふので、若し一生懸命になつて修業致したら如何なもので御座いませう」と、親を思ふ一念から、切りに年月を苦にするのである。「左樣サ、一生懸命にやれば二三十年位は掛らう」段々長くなつて來た。「併し先生、一點の油斷なく、晝夜間斷なしにやつたら、如何なもので御座いませう」。「まあその位にやれば六七十年も掛らう哩」。走る足は躓き易く、功名を急ぐものは却つて後れる。近道を辿る者は迷ひ勝のたとへ、又十郎徒らに成功を急いで段々年月を長くされた。

そこに氣付いた又十郎は、恭しく態度を改めて「承知致しました、それでは今日から、貴翁を師範と仰いで、如何なる仰せにも從ひまする、何卒弟子にして永く引立てゝ下さい」と、茲に於て伴藏先生初めて入門を許した。「よろしい、併し弟子にする

以上は、今日只今から擊劍のげの字も口にする事は相成らぬ、木刀一つ振り廻すことも許さぬ」と堅く言ひ渡された。擊劍を學びたいといふものに、木刀一つ預けない處、聊か功名を鼻にかけさせぬ、先生が萬斛の慈悲である。是を會得せねばならぬ。又十郎は毎日薪を拾ひ、飯を焚き、水を汲んでは下僕の努めをして居る。斯くして三月經ち、半歳過ぎ、間もなく一年と經過したが、まだ木劍一つ打つ術を習ふ事も出來ない。劍道に就いて一言半句の敎へもない。恁うなると誰でも退窟する。

臂を斷つて達磨大師に法を求めた慧可和尙のそれに似て居る、運水搬柴三星霜、達磨は慧可のために佛の一字も口にしなかつた、けれども最後に釋尊以來嫡々相承の正法眼藏は傳附された。震旦第二祖神光大師として、苟も禪門の流れを酌む者の一日だも忘れ得ざるところである。

又十郎もこの成らぬ辛抱を續けることゝして、胸中悶々の情に堪へず、一日緣先に立つて茫然と暮行く空の色を眺めて居た。すると先生足音靜かに又十郎の背後に顯れたかと思ふ間もあらせず、ぴしやり一本「此馬鹿野郎」と怒鳴られた、又十郎の驚き如何ばかり、間拔顏をしてニヤリと苦笑ひ、其儘奥に引込んだ。其翌日飯を炊いて居ると又ポカリ、掃除をして居ると又もポカリ、少しても隙さへあればポカリ〳〵とやられるので、又十郎初めて寸分の油斷をせぬやうになつた。

「油斷大敵」とは實に此事である。精神に寸隙あれば煩腦妄想が頭を擡げる、何事も修業は眞劍でなくてはならぬ。伴藏先生の不意擊に又十郎は漸次精神が練磨されて來た。或時は先生の一擊に、ひらりと身をかはし「如何て御座る」と云ふ處をポカリ一本。愈々窮地に追ひつめられては却つて自在を得るものである。或日飯を炊かうと思うて火吹竹を把り、頻りに竈の下を吹いて居ると「又十郎」聲に應じて下る一擊。持つた火吹竹でハッと受け止めた。その任運無作の妙處を認められた先生は、玆に初めて劍道の極意を授けられ、其後間もなく歸參が叶つたと云ふ事である。

全身を打込む、こゝに三昧の境を現出する事が出來るのだ。徹底の感味は身心に一

點の間隙を許さぬ。劍刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つことは禪の本分底ではないか。

遠羅天釜と二木博士の腹式呼吸

眼ばかりキョロ〳〵させて甘い儲け口を拾ひ出さうと飛び歩く東京人は、お氣の毒にも頭寒足熱と相場の定つた、親讓りの二つとない此身體を、頭熱足寒と反比例に持ち崩し、さて調子の變つた、何かよい方法がと、漸く辿りついた禪門も門番の一喝に逢ふて退身三歩、現今では到る處深呼吸と靜坐法が全盛を極めて居る。

靜坐法では岡田先生、呼吸法では二木先生と、誰知らぬ者なき現代の花形役者、演壇以外の氏の眞面目を記述せんに、門邊の瓦斯燈には「二木」とばかり、あまりに堂々たらざる玄關構へは、醫學博士は概して俗物が多い抔と云ふ不心得者の度膽を拔く。ガラリと格子戸を開けると東北訛の書生さんが取次に出て、往來から黑塀越に見ゆる二階の書齋へ案内された。

床の間には墨痕淋漓たる象山の一軸『長安一片月』と記されたのが、何となく暗示の樣な感が湧く、坐隅にある六曲の銀屏は山陽の筆。書架に積まれた書冊は屏風の上を幾段か御無禮して居る。それが揃ひも揃うて、博士に相應しい背金の洋書等は一冊もなく、何處から探し出されたかと思はるゝ樣な、蠹蝕に供せられたる禪書などが多い「先生大分やって居らるゝナ」と思つた時、博士は二階に昇つて來られた、挨拶の鄭重な、四方山の談話にすら極めて眞面目な、而して飽迄も攻究的な大家振らぬ謙德が、何處までも氏の人格を崇重ならしめて、鹹に床しい感に打たれた『何分にも私は筆不精なので、つい思ひながら失禮ばかりして居ります、いづれ自分の考へを申上げたいですが、時々職業柄臨時な用の多いので、而も瞬間を爭ふ場合があるものですから困ります』

窮屈さうに端然と坐した洋服の膝の上に兩手を置て話さる。

氏は秋田縣の人、明治六年二月秋田市土手町に呱々の聲を擧げた。幼にして學を好むこと甚しく、常に書籍を手にして、未だ曾て群童に伍して遊戯を共にした事はなかつた、中學に入るや其風益々甚しく、元來蒲柳の身は一層烈しく虚弱に陷つた。此時不圖『考女美談砂漠の花』なる一書を讀み、深く感ずる所あつて、身體の運動に心を用ひ、山野を跋渉して身體を鍊り、既往の虚弱は全く消えて、而も强健の身で優等を以て中學を卒へ、間もなく高等學校の入學に競爭試驗の準備として一週間睡眠を廢せし結果、終には問題すら解する能はざる健忘性に陷つたのである。

此時氏に一點の曙光を與へたものは實に白隱禪師の「遠羅天釜」なる一書であつた爾來禪を修して深呼吸の顯著なる効能に驚き、勇氣百倍、明治三十四年醫科大學を卒へて、直ちに東京駒込病院副院長に請せられた。

目下尚ほ神田美土代町なる南天棒の道場に投じて、精神修養を重ねて居らるゝと云ふが、前途有望なる人材として醫界の重鎮を占めて居る、其主張の腹式呼吸法は益々世に行はるゝ實に故ある哉と謂はざるを得ぬ。

後篇

三昧境

文献院古道漱石居士

文壇の巨星、漱石夏目金之助氏は大正五年十二月九日午後六時半、早稲田南町の自宅に於て五十歳を一期として白玉樓中に歸元された。氏が英國留學より歸りて帝大文科に教鞭を執り、博士の學位を返戻して學界の物議を生じた事は人の知る所である。明治四十年朝日新聞社に入りて一意文筆の爲に努力し、名聲頓に上りて大正文壇の巨星として社會の瞻仰を博しつゝあつた。其文章には何となく禪味がある。其性格にも禪味がある、漱石氏と禪と、そも好何なる因緣かある。

指折り數ふれば二十五年の昔、禪が漸く世間的に弘通しかゝつた頃の事、氏は未だ血氣盛りの青年時代、同氣相求むる所に色氣が手傳ひ、態々相州鎌倉の圓覺寺へ參禪と出掛けた。其時の事を氏は或時話された。

「マア私の浮氣話を聞いて呉れ玉へ、お寺に着いた時刻は恰度晝少し過ぎ、奥まつた

一室に通つて宗演さんに面會した時に、不圖可笑しくなつて大いに吹き出した。だつて昨今ならいざ知らず、其當時の宗演さんはまだ年も至つて若いのに、老師々々と云ふのだから、禪坊主といふものは、隨分矛盾した事を平氣で喋舌る者だと感心した。面會が終ると別室に案内される、當分の間此所に起臥して大に修行する積りである」

と、これが抑も氏の參禪の皮切りで、圓覺寺滯在中の一週間、果してどんな悟りがあつたか、餘人所不見の端的、等閑に筆にせぬが花であらう。但し其間に典座をして居た老師の高弟宗活和尚とは大いに共鳴したのは事實である、靜寂なる禪房の一室、獨りアクビ交りに公案を工夫して居る所へやつて來て、白隱和尚の「大道ちよぼくれ」を口を尖がらして歌つて聞かしたのは宗活和尚である。

「夏目さん開靜ですよ」

と搖り起されて、眠い目をこすり〳〵煎餅蒲團から飛び出して時計を見れば午前二時、ゴオンと大鐘が鳴る、版が鳴る、禪堂には早くも兀々端坐の客、喚鐘を相圖に入室の用意がされる、聽て老師の前へ出た漱石氏、趙州無字の公案を「現代科學上の見地では……」と大いに力んでも老師は笑つて相手になつてくれぬ。再び室に歸り來りて一向專念、無？無？無？無？。

この因緣で十二月十二日青山齋場の葬儀は釋宗演師が導師を勤められた。法名は

文献院古道漱石居士

引導法語は

曾斥翰林學士名。布衣拓落樂禪定。
即今乘興遽然去。餘得寒灯夜雨聲。
如何是漱石居士歸家穩坐處
刼火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。咄。

と云ふのであつた。

智辯博識の聖一國師

聖一國師諱は辯圓、初め天台に學んで博識强覽大いに衆人を驚かした。十五歲の時、天台の三大部を讀んで講師を難詰し、自ら先賢未發の考を陳べ、十八歲にして髮を江州三井の園城寺に薙り、奈良東大寺の戒檀に登りて得度受戒の式を終へ、尋いで京都に出て、儒敎を學んだが、一日猛然として獨り志を決し京を去り園城寺を辭し、千里を遠しとせずして下野の長樂に榮朝和尙を訪うた。榮朝は榮西の法嗣、敎外別傳の玄旨を皷揚し、不立文字の當體を會得せる人、辯圓今や多年の文字葛藤を截斷して禪の三昧に一超直入、初めて其妙を味ふに至つた。時に歲二十。

既にして又鎌倉に來り、壽福寺の行勇和尙に參じて禪法を問ひ、當時學匠として英名を藉かせし大歇了心の「首楞嚴經」の講義を傍聽せるも此時である。大歇と幷び稱されたる賴憲僧正は當時三井第一流の學匠であつた。時人呼んで「三井の大鏡」と稱讃して居た。恰も此頃鎌倉入滿に來つて「法華經」を開講せる由を聞き、辯圓直に往いて之を傍聽し、詰難數番、其答辯に窮せるを見て、戲れに

「我れ久しく大鏡の名を耳にす、所謂大鏡は鐵にあらずして瓦なりや」

と、實に惺々たる罵言である。賴憲も流石は一代の學匠、敢て怒らず却つて辯圓を稱讃して「彼れ恐くは鶩子の再來ならん」と言つた、如何に彼の智辯博才天下に敵なきかを想見し得るではないか。

禪要の傍ら經論を研究し閱藏四回、未だ眞の安心を得る能はず、四條天皇の嘉禎元年即ち三十四歲の春を以て遂に航海の途に上り宋國に入つて徑山に無準禪師を訪ひ、暫く其會下に投じて遂に大事を極め其衣鉢を受けて歸朝した。

元來博學達識、加ふるに縱橫無碍の禪機あり、其辯舌には何人も抵抗するものがなかつた。されば其人を接するの方術に於ても潑溂たる機略を發揮するを常とした。當時有名なる儒者菅爲長を屈伏せる話は有名なものである、道長公の紹介によつて初め

て顔々相對せる佛儒の二傑。國師先づ開口一番、

「菅公は儒學に從事せらるゝと眞に然りや、」

爲長これに答へて曰く

「然り、」

時に國師その語に應じて曰く

「我法は佛々祖々傳承し來つて師承なきものは之を虛妄として信ぜず、即ち釋迦世尊よりして五十五世、達磨和尚より二十七代以て我に至る、故に佛徒は皆釋氏といふ、知らず菅氏は孔子より幾世を經るや、」

爲長この一言に詞屈して退き、また言ふことを知らなかつた。凡そ國師の人を接するの手段はこの一例を見ても知らるゝのである。後宇多天皇の弘安三年十月十六日東福寺の常樂庵にあつて命終せられた、世壽七十九歲、其門下極めて多き中にも京都南禪寺の開山として有名なる無關普門和尚の如きは蓋し傑出せる一人である。

努力主義の兒玉玄海和尚

數年前、八十歲の高齡で遷化された兒玉玄海和尚。たゞ斯う云ふたのみでは今の人は知る人稀であるかも知れない、が予にとりては忘るべからざる恩師であると共に、低頭佇思、意根下に卜度して能事終れりと心得居る現代の教界には、斯る偉僧もあつたと云ふ事を知らして置くのも强ち無益の事ではなからう。

越後國岩船郡、三面川の上流を遡ること二里、蒼蒼たる老杉古松の間、幽に鐘樓堂の見ゆるは名にし負ふ南朝の忠臣楠正勝公が發心の跡を止めたる耕雲寺である、白雲を蓋と爲し、流水を琴と作す、元是れ好個の禪窟。和尚はこの禪窟に在つて常に雲兒水弟を接得して居られた。超世絕倫の高風を慕ひ集しもの幾百千、或時は麒麟の頭角の如く、或時は火裡の蓮華に似て、如何なる雛僧に對してだも滿身の努力を捧げて提撕する、帶水拖泥と言はゞ云へ、和尚の四邊は常に颯々たる清風を以て充され

て居た。

想起す。十有五年前、予は漸く十六歳未だ東西も知らぬ一個紅顔の雛僧、天台笠に袈裟行李、瓢然として天下獨歩の鹿島立、數日を費して辿り着きしは和尚の門である。當時和尚は既に七十二歳の高齢であつたのだ。

潺々たる流水の響も霹靂の如く聞え、塒に迷ふ鳥の音も耳朶に徹して眠圓ならぬ旅馴れぬ眞夜中、枕頭幽に人の歩むに似て而も音するが如く、せぬが如く、殆んど毎夜同時刻に匝一匝する一大怪物がある。この怪物こそ老師が深夜の點檢とは、後に至りて始めて知つたのである。この點檢たるや、實に微細の處に迄行渡つたものであつた。或時の如きは須彌壇上の花瓶が倒れて居ると云ふので、知殿寮詰一同が深夜の口宣に逢うたこともあれば亦或時の如きは炊事當番の者が、釜の底に附いた燒付けをば其儘にして寢に就いたのを、和尚は眞夜中に奇麗に洗ひ落して自ら其黑コゲの御飯を食べて了はれた、と云ふことが翌朝になつて分つたこともある。

和尚は常に左右の隨徒に言うて居られた「凡そ一寺一家の主となるものは須彌壇上本尊の鼻孔裏より、勝手元は云ふも更なり、便所の隅に至る迄、悉く吾が一身と心得、晝夜點檢を怠つてはならぬ」と蓋し日々の行持よく佛祖の行持たるの大自覺より出でしものに非ざれば、決して老師の眞似は出來まいと思ふ。

若し夫れ向上底の鉗鎚に至つては千聖も窺ひ難く、向下底の作略亦佛祖も辨ずる莫き我兒玉和尚の行履は實に今思ふだに有難き次第である。和尚晩年の隨徒は多く年少の雛僧のみに滿たされて居たので、朝は和尚自ら客殿に上つて小鐘を打つ、以て一同を起されたものである。其綿密なる家風は太皷の打方一つだも叢林の生命として嚴正を極められ、廣き境内は親ら率先して庭掃き草取に至る迄納僧の本分と云ふ自覺の上に、曾て一度だも大衆に一任すると云ふが如き事はなかつた。其峻烈なること秋霜の如く、而も衆を愛撫するや親身も如かず、一箇の果物一握の茶菓、等しく衆に分配して然る後其餘りを自身で味ふと云ふ有樣。衆を率ゆる作家の態度、實に床しき事では

ないか。

和尚は徹頭徹尾努力主義の人であつた、若冠時代より乘物は其尤も嫌ふところで越後蒲原郡の村松より村上間約廿數里の地を一日の間に徒歩さるゝのが例であつたと云ふ、古稀を超ゆるに及んでも同じく徒歩主義で通された。曾て春の彼岸會に羽後國酒田町海晏寺の請を受けたことがある、雪に名高き北越の山村、而も羽越間には葡萄峠の險阻があつて、雪解頃はナダレと稱する危險の爲に全く通行が出來ぬ、日は切迫して居る、和尚は海岸の一線路を取らうと云ふ、此道路たるや斷岩絶壁の間微かに漁家の子女が町へ買物に出るに止まる飛石傳への名もなき細道、この細道を辿るべく予と更に一人の隨行は約八貫目の荷物を負うて一日十六七里、和尚と共に丸飯を嚙り乍ら三日目に酒田に着いたのを記憶して居る。

七十三歳の冬、嚴寒骨に徹する或朝の事であつた「衲も大分弱くなつた、我慢をしても首卷を取るのが大儀ぢや」と言はれた。和尚の首卷をされたのが此冬が始めてゞあつたのだ。「年は取りたくないもの、どうも足腰が冷へる」と云うて炬燵を掛けさせたのも七十三歳が生れて初めてゞあると笑つて居られた。乍併、虎兒を擒ふの意氣は尚衰へぬ、七十四歳にして英語の研究と、演說の練習を努められた、其活達縱横なること壯者を凌ぐの修養振に至つては、到底凡人の企て及ぶ所ではない。

生々世々の修養を身に體した和尚の眼目は慥に一頭地を拔いて居られた。常に聖賢の書に親しみ、習字は一日たりとも休まず、而も凜々たる墨痕は洞門第一の稱があつたのである。遷化前數日、三條町上宮教會の講演に赴き、偶々看板の揮毫を依頼され、莞爾として將に筆端龍を呼ばんとする矢先「もう駄目ぢや……」と、筆を投じて歸路に就いた。其時の如きも信者の勸めた人力車を斷り、一杖一笠瓢然と徒歩數里の閑居室に歸つた抔は亦是れ塵外の偉風と謂はねばならぬ。

予は個人として法幢師たるの禮を執る外、禪門の名師として、當機直截、逆順縱横、八十歳の方便門を轉じて大解脫門に入りし故和尚の面目を偲ばざるを得ぬのである。

鐵舟居士の無刀流

倶胝和尚は遷化に臨み、衆に示して曰く「吾れ天龍一指頭の禪を得て平生受用不盡」と、眞に自己體得底ならば三尺の寶劍も用不着、一指頭を以て能く敵刃に方る事を得るであらう。明治天皇に仕へて不世出の偉勳を奏せる山岡鐵舟、九歳の時より劍法を學び、初めは久須美閑適齋に從うて眞影流を受け、後に井上清虎に就て北辰一刀流を受け、最後に淺利義明の門に入りて一刀流の極妙を究めんとして從晝至夜の苦練、未だ其堂奥に達する事は出來なかつた。偶々禪に七擒八住自由無碍の妙所ありと聞き、天龍寺滴水和尚の門に參じて其玄底を叩いた。滴水即ち鐵舟のために示して曰く

「兩刃交レ鋒不レ須レ避、好手却同ニ火裡蓮一」

の話を提して之を授けた。鐵舟この話を拈提すること前後三年、一日豁然として省悟す、直ちに淺利義明に見えて共に竹刀を持つて立上つた。然るに不思議なる哉、最初義明の竹刀が宙に懸つて擊つこと能はざりしも、今は全く自己の下に見えて自由の作略を發揮するとが出來た。義明忽ち竹刀を抛ち、容を改めて曰く「子既に至れり」と稱譽措く所を知らず、直ちに一刀流の無想劍の極致を傳へた。時は明治十三年三月三十日の事である。爾來鐵舟益々精究不斷、古人未發の蘊奥を發明し、竟に無刀流の一派を開き、その演武の道場を春風館と名けた。これは北條時宗の師範として有名なる佛光國師の「電光影裏截ニ春風一」の句より取つたものである。苦修三年、參禪工夫の眞價は鐵舟居士によつて遺憾なく發揮された。

元兵の膽を奪ひし佛光國師

鎌倉圓覺寺の開山第一世佛光國師は北條時宗公の請聘に應じて遙々來朝された支那宋末の高僧である。十萬の元兵を退けたる相模太郎の膽力は國師の提撕に因る事は人の知る所、（拙著「禪林奇行」附錄「北條時宗と祖元禪師」參照）今鐵舟居士によりて春風

館の名を藉られし一偈には千古の美談がある。それに先だつて予の感奮措く能はざる國師の修養時代につき、暫く此間の消息を語らしめよ。

佛光國師本名は祖元と稱し、無學と號し、宋國明州の慶元府に生れた人である。生れて一周年を經たる初誕生日に當り、父母は可愛き乳兒が天性嗜好の所在を試みんがため、種々の異る物品を陳列して之を取らしめた。乳兒は笑つて唯一卷の經を取れるのみ、他は敢て顧みんともせず、將來偉僧たるべき因緣は早くも顯れて居たのである。既にして七歳、博覽强記、群童と伍せず。十二歳の春父に伴はれて或山寺に遊んだ。處が僧あり、

竹影掃レ階塵不レ動。月穿レ潭底一水無レ痕。

と吟詠する聲を聞き、幼心には早くも山寺を愛するの心、出家求道の望みは閃めいた。翌十三歳にして不幸にも父の逝去に逢ひ、杭州淨慈山に走つて北澗禪師に就き得度の儀式を行ひ、超へて十四の時徑山に登つて無準禪師の門に投じた。禪師は「狗子無佛性」の公案を授けられた。國師はこの公案につき晝夜參究工夫すること七年の久しきに及んだとある。一年三百六十五日、七年二千五百五十五日專心兀坐此問題に苦心せられた點は常人の判斷すべからざる偉大なところである。或夜四更に及び、首座寮の前にある木版の聲がカンカンカンと三下する響を聞き忽然として省悟あり、早速師の無準に什麼の端的を披瀝した。無準禪師の法に親しき、等閑の小悟には耳だも藉さず、更に「香嚴擊竹の話」を提起して策勵を加へた。

然るに師の無準は其後間もなく遷化せられたので、國師は徑山を辭して諸所行脚の途に上り、十有餘年の久しき一日も懈怠しなかつた。一日某所を通行するに方り、井戸の水を汲みあぐる轆轤のクルクルと回るを見て廓然大悟の地位に到達した。時正に三十六歳。

其後、台州の眞如禪寺に住して衆僧接得の赤旛を翻した。時恰も宋末の頃とて元兵國內に闖入し來り、眞如寺にも亂入した、眞人の眞の膽力は斯る不意なる非常時に於

て發揮される。今や白刃閃めく元兵の暴亂に際會せる一山の大衆は悉く逃亡した、獨り國師一人寺に殘つて平日の如く丈室に端坐冥目して居られたのである。數名の兵士は秋水一閃國師の首に方てた。其時從容として

乾坤無地卓孤筇　幸得人空法亦空、
珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風。

の一偈を打して神色自若、流石の元兵も其膽力に怖れて倉皇寺を出て去れりと。其後時宗公の請に應じて我國に來り、弘安九年九月三日圓覺寺に於て入滅せられた。佛光國師とは後宇多天皇の諡號である。

河野盤洲參禪の動機

福島縣三春の山中より、民權自由の團扇太鼓を叩き出して世間を騷がした當年の河野盤洲、素晴しい勢て仙臺に乗り込み、引續き各地を遊說した。廻り〳〵て相州鎌倉へ來たが、其歷史的風景美に打たれ、且つ近き大磯は曾我の十郎の俤を忍ばす化粧坂、明治の虎御前が襠衾も慕はしく、縞の財布を空にして、フト本心に立返つた時、近頃名高き洪川老漢、圓覺寺門頭の物淋たる風光に釣り込まれて計らず老漢の室を叩いた。

「河野さん民權の自由とお騷ぎなさるが、一體自由とは什麼な姿ぢや、御存知かへ」

老漢チクリと急所を刺した、盤洲も負けぬ氣で、

「自由とは我々精神の向ふ所、總て障碍を去つた事ではありませぬか」

「其障碍を去つた處は什麼な姿かと問ふのぢやよ」

凄い眼玉で睨まれては、流石の盤洲も二の句が繼げぬ。渾身の勇を鼓して漸く、

「和尙さん何うすれば自由の姿が見られませうか」

「わけはない、死ねば宜いのだよ」

兒を憐んで醜を忘ずるは親の慈悲、敎へもするが折角工夫するがよいと言はぬばかり、

一向譯が別らぬ。活きて居ればこそ自由もあり民權もあるのだ、死んで了ふてどうなるものか……とは思つたものゝ、上京の途中頭を捻つて見ると、何だか洪川和尚の言葉に無限の意味があるやうに思はれる。

爾來、再び老漢の門を叩いて「趙州無字」の公案を授かつた。然るに明治十五年民權自由を主張し過ぎて牢獄に繫がれの身となつたが、縛に就く前日、神田の古本屋で買つた「碧巖集」と「無門關」を携へて暗い一室に拋り込まれた。

一度は仙臺の獄に送られたが、時恰も嚴寒肌に徹する冬の半ば、薄き獄衣に皮肉爛れて紅血も氷るばかり、冷たき板の間に端然と坐して四寸角の格子より仰ぎ瞻るは雲表遙かなる天安寺山、白皚々たる山腹に面して只管に無字の公案を拈提した。最早斯うなつては寒さも苦しさもない、飢も渴も糞も小便もあつたものでない、專一無雜の端的である。其結果這箇の一事を究明することが出來た。爾來禪を以て唯一の精神修養となし、現に南天棒會下唯一の居士となつて居る。

夢裡に入宋せる夢想國師

鎌倉室町の禪の勃興時代、多々輩出せる禪僧の中に、道譽尤も高く朝野を風靡せしは實に夢想國師である。夢想は伊勢の人、十歳母に逝かれて獨坐澄心を事とし、十八歳の時祝髮して南都東大寺の戒壇院に登り、示觀律師に就いて受戒し、笈を四方に負ひ各宗の明師を訪うて顯密の二乘を究めた。然るに一朝自ら深く以爲らく「佛教多種ありと雖も歸する所は蓋し一なるべし、而も其歸する所に至つては智學の企て及ぶ所にあらざるべし」と、玆に於て心縛に教外別傳の宗意を慕ふに至つた。

一夜佛前に合掌禮拜、佛陀の指導を仰がんと靜に瞑想三昧に入つた。然るに夢の中にあつて宋國に遊學し、疎山と石頭との兩寺に參詣するに、一人の老翁あつて達磨の肖像を齎し來り、之を授けて曰く「汝克く之を捧持せよ」と、既にして忽然として夢覺むるや、こは全く禪門に因緣あるの靈告なりと感奮措く所を知らず、名を疎石と改

め。夢想を以て其號となすことにした。後後醍醐帝この號を取りて國師號とせられたが、夢想は前述の如く夢の靈告に因せる自稱である。

爾來、夢想は教家を離れて禪門の人となり、先づ京都に出て、無隱和尚を建仁寺に拜し、朝三暮四只管に參究寢食を忘ずるに至つた。後宋國より來朝せる一寧一山に參ぜしが機未だ熟せず、去つて鎌倉萬壽寺に佛國國師顯日を訪うた。佛國乃ち問ふて曰く「寧一山汝に對して何の言句ありや」と、夢想答へて「向上の一路慈悲もなく方便もなしと言へるのみ、因つて初入の方便を求めんがため乃ち去れり」と露骨に自白した。佛國聞き了りて聲を勵まして曰く「和尚遍逗少からず」と大喝を下した。夢想言下に大悟す。爾來、常州臼庭に隱れて晝夜を辨ぜず兀坐精勵、悟後の修行全く圓成して佛國の印可を得たのは嘉元三年、夢想三十二歳の時である。

路傍の婆子に遣り込められし德山

兎角學者は學の爲めに縛され、才子は才に依つて溺れ勝なものである。されば古人は「機位を離れずんば毒海に墮在す」と誡められた。支那禪門の一派たる雲門宗の耆宿、德山宣鑑和尚の如きも、其前半生は確かに其仲間であつた。和尚は常に教相の玄旨に參じ、實究久しうして赤幡の下清風を起す、天下人の舌頭を坐斷して七縱八横、自ら第一流の教相家を以て任じて居た。時恰も南方佛教は教外別傳不立文字を宗とする禪風大いに競ひ、世を擧げて之に赴くの有樣、德山奮然として起ち、何事ぞ「經を離れて義を解すれば三世佛の仇」加かず自ら彼地へ參り、大いに群を驚かし、衆を動かし吳れんものと、多年研讃せる金剛經の疏鈔を荷ひ、勢ひ凄じく南方指して路を急いだ。

澧州の路上に到るに及んで、一寸空腹を感じたが、見れば路傍に小瀟洒した掛茶屋、

中に六十前後とも思はるゝ婆さんが駄菓子を並べて餅を賣つて居る。これ幸と腰を下し、婆さんに件の餅をば所望に及んだ。然るに先刻より德山の樣子をじろ〳〵眺めて居た婆さん「ハイ〳〵」と持つて來るかと思ひの外、「大德笈子の內是れ什麼の文字ぞ」貴僧は重さうに澤山の書物を荷うて居られるが、一體何の本かいと、とんでもない事を聞き出した。「婆さんこれはお前には分るまいが金剛經と云ふ有難い經文の疏鈔であるぞ」「フン何かと思へば金剛經かい、それなら其お經に過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と云ふ事がある筈、貴僧は一體、その中のどの心に點心する事か、それを承はりたい、さもなくば婆の餅はお錢では賣られませぬ」と一本參つた。德山は實に意外である、斯る路傍の一婆子に金剛經の拶着を與へられようとは夢にだも思ひ設けぬところであつた。さて、現在心か過去心か、それとも未來心か、グット詰つて燒物の巾着同樣、口を開く事が出來ない、思へば我ながら淺ましい敎相家であると、大いに反省するところがあつた。

於茲、德山は考へた、路傍の婆子にすら此機略がある以上、定めし附近には大善知識が居るに相違ないと、自慢の兜を脫いで「近裡甚麼の宗師か有る」と婆さんに問うた。「五六里行くと龍潭と云ふ大德が居られるから、そこへ行かつしやれ」と敎へられて、龍潭和尙を尋ねて行つた。

「久しく龍潭と云ふ名は天下に響き亘つて居るが、音に聞く程深い潭もない、龍潭は何處に居るか」

と、玄關先から大音聲で呼はつた。すると玄關の衝立の後で、すつかり聞いて居た龍潭、すつと出て來て、

「汝は久しく龍潭に見えたり、脚跟深い池の底迄屆いたぞ、話せる奴ぢや、上れ」

とあつて、初めて師弟の約を結んだ。

爾來、粘を解き縛を去るに努めたる德山、一夜和尙の室に入つて所解を呈し、今や我が室に歸らんとして簾を揚げれば、折しも降り出したる大雨に、廊下は黑白も分か

ぬ眞の闇、「和尚外は眞闇ですよ」と尻込みする「そんならこれでも持つて行け」と紙燭を與へられた、受取らうと手を差出したる一刹那、和尚はフッと火を吹き消して了つた。時に德山は翻然として省察するところあり、改めて入室の上厚く和尚の慈悲を謝したのである。

翌日、本堂の前に積み重ねられたるは十年一日の如く研讃措かざりし金剛經の疏鈔であつた。德山はそれに火を點じて呵々大笑。初めて白雲を喝散し、虛空を打破する底の機略を得た。其喜びや蓋し今人の圖り知れざるものであつたらうと思ふ。

反省會の米峰と禁酒會の米峰

「道德だの宗敎だのと云ふと、如何にも高遠なものゝやうに考へて居る人も少くないやうだが、そんなに高遠なものでは、吾々凡人のお役に立たない。道德や宗敎が凡人には用のないものだと云ふなら格別だが、苟もさうでない以上、吾々凡人の手の屆き足の屆くところに道德もあり、宗敎もなくてはなるまい」と、其著「店頭禪」が洛陽の紙價を高からしめたる以上、前「新佛敎」主宰者、現丙午出版社主高島米峯氏を埒し來つて本編中に入れたからとて、聊か異議を挿むものもあるまい。氏は全く禪僧のそれの如く徹頭徹尾努力主義の人だ、あの弱い身體で一社を經營し、月刊雜誌を主宰するのみかは、近來頻りに縱横の健筆を揮つて思想界を賑はせる。嚴然と控へた店頭の机は夜店にあつても五十錢位、この机で算盤も彈けば萬年筆も動く、來客もあれば電話もかゝる、眼の廻るやうな忙がしさで、而も講演にも出れば公私の會合には大抵眞先に出て來る、が氏は絶對に酒を飲まない。然らば最初から嫌ひなのかと云ふに全くさうでもないとの事。八九歳の少年時代には無暗に飲んで鄕童を驚かせ、醉ひつぶれては小間物店をひろげた事も珍らしくない、十四五歳の頃にはコップに一杯、グット一息にヒッカケて靜かに口を拭つて居る位に上達した。然るに十七歳の時病のために全く酒を禁じ、反省會員となつて終身禁酒を誓つたのは其翌年の事である。

禁酒と其名の同じきため思ひ出さるゝは小山米峯翁である。翁は政界に其名を知られたる酒中の仙、飲めば即ち醉態淋漓、奇言奇行人を驚かす。餘りの放縱に妻君ほと〳〵困じ果て、勸めて基督教の禁酒會に入らしめた。先生、門に「禁酒會員」の金標札を高く掲げて知人を驚かせたが、畢竟これ細君に對する和協の方便門、眞に酒の供給を杜絶されては內心寂寥の感に堪へない。無字の公案を與へられた雛僧同樣、從晝至夜、無の字に換ふるに酒！酒！酒！

窮すれば通ず、先生一策を案じて酒屋の小僧に內意を含め、毎朝こつそり書齋の窓前に伺候させた。先生の書齋は往來に面せる一小樓、目前通行の途端フト見返ると書齋の窓より一本指、「ハヽ今日は一升だナ」と小僧君合點しては貧乏德利を提げて來る、二本指の時は二升、少々重いので先生兵兒帶を垂れてはブラ上げて書棚の中に安置し奉る。チビリ〳〵聞こし召しても誰一人之を知るものがない、大いに得意になつて居ると、一日外出の不在中、計らず細君の爲めに看破されて、歸來大いに米の油を搾られ、窘窮の極、「禁酒するはいと易いが、それでは政府が困る、現今我が日本の財政狀態と謂ッば……」滔々盡る所を知らず、細君呆れ果てゝ「どうぞ御隨意に遊ばせ！」と言うたであらう。

禁酒會よりは反省會の方効果ありと見え、米峯高島氏は爾來廿幾年、有らゆる誘惑と鬪つて今日尙ほ禁酒を持續して居る。而も潑溂たる禪機に至つては、早くも俱胝一指頭の禪を會得せる破戒米峰憾かに一籌を越す。

一生菴主の正受老人

嘗つて蓮如上人が「佛法は知りさうもないものが知る」と言はれた、眞に千古の名言ではあるまいか。近時、何宗何派の管長、法主、禪師、阿闍梨、座主、上人と其肩書と住職地を以て虛名を貪り、紫、黃、緋の衣に四邊まばゆき金爛の袈裟、水晶の念珠を抓つて多くの信徒に圍繞せらるゝを無上の光榮と心得て居る者が多い。斯る輩に

は却つて佛法を知らぬ者がある。「名利に心ある者は僧にあらずして畜生なり」とは無難禪師の誡め。禪門の僧徒は心して名利に奔るの念を折伏すべきである。

今茲に陳べんとする正受老人の如きは、一生涯山中の小菴に居して、而も將に地に墜ちんとする大法を鼓揚したてはないか。正受老人諱は慧端、字は道鏡といふ。信州飯山の城主松平侯の庶子である。然るに如何なる因緣にや、十三歲にして早くも佛法の大事に心を寄せられた。竊かに自己を究明して大疑團に逢着し、晝夜思念して止むとなしと云ふ有樣であつた。傍人痴と呼ぶも敢て關せず、熱心に此事に工夫した結果、十六歲の時、或る機會により豁然として大悟するところあり、拍手一番呵々大笑。多年の疑路全く開けて勇躍歡喜の極、皆之を見て狂せりと想はざるものはなかつたほどである。

けれども無師獨悟は眞の大事了畢とは許せぬのである。師は明師に參じて之を質さんと思ひ、十九歲の春父に隨つて江戸に出て、至道無難禪師の高風を傳聞して、麻布の至道庵に尋ね往き、一度謁見を得るや師弟の機緣互に相契ふ所あり、即坐に髻を截つて僧形となり、名を慧端と改めた。大名の子としてこの英斷は實に千古の美談である。

出家以後十有餘年間、無難禪師の惡辣なる毒手に觸れて少しも恐れず厭はず、唯驀直進前其堂奧に上るべく奮勵せられた。無難禪師の半生涯は前篇に述べし通りである、而も其室內孤危峭峻、何人も容易に近づくべからざる有樣であつた。獨り正受老人のみ能く其鉗鎚下に在りて遂に上足となり、頭角を顯はすに至つた一事は後進晩學の範とすべき所。禪師晩年に及び小石川至道庵を老人に繼がしめんとしたが、肯ぜずして鄕里に歸り、幽邃の地を卜して一小庵を結ひ、正受庵と號し終生を悟後の修行に餘念なかつた。後年俊傑白隱を得て大法を相續し、臨濟の禪風を皷揚せしめしは全く其道力の一分である。享保六年十月六日、八十歲を一期として遷化された。

東瀛和尚と頭山滿

依頼とあれば越後から米春きにも來るが、さらばとて濡手に粟の黄金一函、貴殿に進上と云はれても「左樣か」と受取れぬ場合もある、こゝが世に云ふ義理と人情、自尊自重自護自制、修養の要諦は此間に存するのである。

昔、魯に何れも濁身者で、處士と若後家とが隣を卜して住居した。「梅が香や隣は女寡なり」で人の羨むほどであるが、處士中々名譽の士、垣の彼方は見向もせぬ。然るに一夜時ならぬ暴風雨に、若後家の住居の屋根を吹捲つてドットばかりに雨が降り込んだ。若後家早速處士が家の牖口より「どうか今宵一夜を宿めて下さい」と申込んだ。恰も雨になやめる海棠のそれにも似たる可憐しさ。すると先生「それは嘸お困りてせう。が生憎お互に若い同志、お宿は御免蒙る」と無下ない挨拶、若後家涙ながらに「ほんにあなたは無情な人、柳下惠先生を御覽遊ばせ、大寒の夜、廓門外に留まれた時、合宿をした女が寒からうとて、同衾して寢られたと云ふてはありませぬか、それでも國中誰一人先生を疑くる者はありませぬ。貴方も同じ敎の流を汲む方、どうぞ今宵は是非に……」と秋波を寄せたかどうか、暗の夜の事とて分らなかつた。處士先生之に落ちるかと思ひの外「いや其處てす、柳下惠なら抱いて寢やうと少しも差支ない、余に於ては不可なり」と言ひ張つたので、若後家は終に他に赴いた。孔子之を聽きて「善い哉柳下惠を學べる者や、其心を推して其爲を襲はす、智と謂ふべし」と稱されたりと家語にある。

此處士の境涯を現代に求めて、博多聖福寺の東瀛和尚を得た。和尚は前にも述べし如く臨濟の耆宿である、當時中國にある有名なる往古の戒壇、勅願所なりしを目下荒廢に傾きつゝあるので、大本山妙心寺管長は和尚の道譽一世に高きを懷ひ、奬めて右の勅願所に住せしめんとした。戒壇は婦人に戒を授くる精舍であるとの事、和尚聽きて了つて首を左右に振つた、如何なればと問へば「危いからな」と唯一語。

あゝこの愼重なる自警あつて、以て法燈を末世に煌燿すべきのみ。滔々たる天下の僧侶幾萬、金殿玉樓の伽藍を夢み、位置を得んとあせる者のみてはないか。其下から赤い信女が所在に膨れ出す、要は「危からぬ」に基因するのである。

太宰府の舊址たる筑前の畠に、種のかはつた天道生が右の瀛和尙に頭山滿。若し夫れ頭山の性格を謂はんか、和尙とは全くの正反對、彼は全諸を以て生命とする者、その艶話として傳へらるゝ洗髮のお妻に於ける、將た心して彼の左手を見よ、其一本の指は半分になつて居るであらう、こは嘗て一乾分が金を借りに來た、生憎嚢中無一物、止むなく彼は附近の某氏を訪うて借用を申込んだ、其砌り「何か抵當があらば」との事に、「諾」とばかり袂を探つて小刀を執り、一指を截斷して滴る血汐を白紙に拭ひ「目下の抵當ぢや」と投げ出したとの事である。

相反する二傑の面目、窺ひ得て頗る妙味があるてはないか、滿は屁をこく、瀛は香を焚く、滿は波を揚げ、瀛は風を御す、然し其品位を論ぜば、瀛の境涯は遙かに超人の域に達して居るものてはあるまいか。

琢禪和尙の乞食連歌

佛を呵し祖を罵り、十方を坐斷して壁立千仞と云ふが如き、向上の第一義諦のみを見て禪僧の行履と心得てはならぬ。百尺竿頭一歩を進むる時、身は再び地上に返り來つて向下底の活三昧に住する、これを回向還照とも云ひ、向上却來とも云ふ。向上は人の欲する處、向下の一段に至つては古往今來、云ふべくして行つたものは極めて少ない。

琢禪和尙と云ふは德川時代に於ける禪門の高德である。常に名聞を嫌つて一生不住、諸國を行脚して下化衆生の本分を全うした。一日大家の門に立つて托鉢をして居ると、其家の主人は吝嗇一點張、未だ佛とも法とも知らぬ我利々々主義の憎まれ者であつたので、門前に聞ゆる托鉢僧の經の聲を五月蠅く思ひ、「出ぬよ」と怒鳴り立てる。和尙

聞いて聞こへぬ振、聲朗に猶も獨誦を續けた。主人は何と思つたか、聊か心得ある連歌を咏みかけて、

いかに云ふてか驚かすべき

と下の句を云ふたので、琢禪和尚、早速上の句を附けて

罪あるや法の聲をもいとふらん

と申しければ、主人は未審しき旅の僧、只今の上の句の意味はと、問はるゝまゝ好因緣と直ちに室に入り、諄々と教化の歩を進め、

十惡の立ちならびたる其中に
欲に優れるせいたかはなし

と咏み出てゝ、佛法の妙理を說き、欲心の離るべき事を誡め、幾多の例を惹いて聞かされたので、流石貪欲我慢の主人も遂に佛法を喜び、今宵は是非一泊されよと勸むる手を振り拂つて

門に立ち物乞ふ人の聲きかば
あはれと思へ施さずとも

悠々として立ち去り、白雲を共としていづくとゝなく歩を移されたとの事である。

妙心開山關山國師

三十六嶺奇峰峙つところ、加茂川の清流と共に京都は自然の境致、輪奐の美を競ふ佛堂伽藍は天然の絕景に對して桓武天皇以來一千年の都、都の花が佛敎であつたと云ふ事を物語つて居る、而もその殿堂の中心となれる五山十刹も、遷りゆく星霜に伴れて玆に幾轉變、今や兩本願寺を除く外は臨濟の本山たる妙心寺のみが過ぎにし往昔を偲ばしめるのみである。

妙心寺は花園法皇の心願によつて建立されたものであることは史上の事實、其開山は關山國師慧玄和尚である。和尚の法皇に歸依を受け妙心の開祖となれるは、素より

非凡の德行の然らしむる所、今玆に和尚が修行時代に於ける事蹟の一端を叙して見たいと思ふ。

和尚は信濃に生れ、相州鎌倉の建長寺に臻つて出家し、高嚴和尚を授業の師と仰いだ。時恰も建長寺の開山忌が營まれて、四來の雲兄水弟雲の如くに集つた。和尚は其人々に就いて、天下師と仰ぐべき人は誰なるやと問ふに一僧あり「現時眞の善知識は大燈國師妙超のみ」と敎へて呉れた。和尚喜び勇んで翌日早く鎌倉を辭して京に上り、紫野大德寺に至り大燈國師に相見したのである。直ちに問うて曰く

如何是宗門向上事

國師問に應じ、聲を張りあげて唯一言、

關！

と言つたばかり。和尚は聞き了つて無言のまゝ匆々衣の袖を抱へて其所を立去つた。蓋し關山は國師の接化の手段に驚き、國師亦和尚の尋常一樣の雲水に非ざるを看取した。其後姿を眺めて

作家禪客天然ニ有リ在ル。

と謂つて左右の侍僧を顧みた。翌日改めて和尚は大德寺へ來り掛塔を賴んだ。國師は「誰かの紹介狀を持參せりや」と侍僧をして聞かしめると、和尚曰く

「夫れ善知識は金剛の正眼を具すべし、學人來つて僅かに門を跨ぐあれば已に其の心肝を徹見すべし、什麼の紹介をか要せんや」

と。國師は此一語を聽いて直に掛塔を許した。爾來、參玄工夫雲門の「關」の公案に向つて專心一意、二十年の久しき一日の懈怠なく唯々這箇の一事を參究するのみであつた。元德二年の秋、初めて大悟徹底、國師の讃辭を得るに至つた、時に關山和尚五十四歲。

其後は美濃の伊深山に隱れ、晝は出てゝ細民の奴僕となりて農事に從ひ、夜は草庵に歸つて坐禪工夫に餘念なかつた。斯くすること凡そ十年。

然るに延元二年の冬、大燈國師病氣危篤となり、其趣九重の宮中に傳はつた。平素より國師に歸依し師として遇し居たりし花園法皇は、特使を大德寺に遣はし玉ひ「和尚滅後、朕は誰に向つて法を問ふべきや、多くの弟子中越格の者は誰そ」と宣ひたるに對し、國師は復奏して「諸弟子中我が骨髓を得たるものは獨り關山慧玄あるのみ、然るに彼れ目下尚ほ修行中にて行衛知れず」と、間もなく國師は遷化された。

法皇いたく關山和尚を信じて天下に令し、其所在を探らしめて京に連れ歸り、花園離宮に於て拜謁したのは和尚六十一歳の時である。

陰德あれば陽報ありの金言、關山和尚に於て證明される。昨は農夫の群に交つて鋤鍬握れる乞食坊主、今は上皇の離宮に於て其師範となる、やがて妙心寺を創するに至りしも全く和尚の道業の然らしむる所、五百年後の今日、和尚の德行を體する眞の衲僧出てずんば、濟下の將來も蓋し如何に成りゆくであらう。

禪機潑溂たる侯大隈重信

佛祖の縛を解開しては道に東西の差別はない。潑溂たる禪機獨り禪僧のみの專有物と思ふと大間違ひ。何物かによつて向上の關捩子を透過せる者は往古來今、縱橫無碍の活作略がある。玆に前內閣の總理大臣侯爵大隈重信閣下と謂はんよりは早稻田の御大て通つて居る丈に、侯は夙に經世の志を抱き、目を世界の大勢に著けられた丈け、其心掛も亦青年時代より尋常一樣ではなかつた。

明治の初葉、國人の多數が未だ見た事も聞いた事もない中から「ステートマン・エンヤ・ブック」を讀み、歐米列國の軍備、財政、敎育、經濟等に關する統計的數字を諳記し置き先生得意の快辯に任せて、之を述べたてられるので、一時の俊傑概ね皆烟に捲かれた。すると慧敏なる中井櫻洲之を聞き、彼男何ぞ種本を得て居るに相違ないと、其頃の學者連に問合せると、果して「ステートマン・エンヤ・ブック」と云ふ世界年鑑

のあることが知れたから、諸方を捜して早速件の書を借り來り、意を刻して目星い統計を諳記すること數十項、軈て侯を訪問した。さてお極り文句の挨拶が濟むと櫻洲は先づ開口一番、英國の國債は幾億磅にして、佛國のそれは幾何なり。米國の貿易額は幾萬弗なれば、我國のそれに勝ること幾十倍と、悉皆侯のお株を奪つて滔々と浴せかけた。流石の侯もフヽと笑ひ出し、

「アヽ君も讀んだのか」

と、强に逢うては弱、擒住自在は禪の本分とは云へ、侯早くも此間の的意を了得して居た。相手を呑んでかゝると云ふ事は容易いやうで中々出來ぬもの、況してや變通の作略に於てをや。

豪膽無類の由利滴水

若し箇漢ありて出て來らば、大海を掀翻し、須彌を踢倒し、白雲を喝散し、虛空を打破するも敢て驚くには足らぬ。一機一境に向つて自己本來の靈光を味まさゞるは衲僧家の常である。

元治元年七月二十日、薩州の兵大擧して嵯峨に迫り、遂に天龍寺を燒き拂つた、天龍寺は臨濟一派の本山、當時掛錫修行中の由利滴水は素是れ把住自在の活衲僧である。焔々たる火中を進み入つて開山堂に至り、夢想國師の木像を負うて林中に遁れ、端なく「劫火洞然の話」を會得せられた。心地一點の油斷なき禪僧の面目はかゝる非常時に際して却つて發揮することを得るのである。明治初年の頃、擧げられて終に天龍寺の管長となつた。道俗の歸嚮日に繁く、得庵、鐵舟兩居士の如きも和尚の槌下に人となつた。

和尚、晩年に丘林寺に移られた。一日侍者を隨へて池畔を徘徊し、フト誤つて足を踏み辷らせ、池中へ眞逆さに陷ちた。侍者は直ちに身を以て和尚を救ひ上げたが、巖石に觸れたものか和尚の肩邊肉破れ血が夥しく流れ出づるので、近村の某醫を迎へ

て應急の治療に取掛つた。然るに古稀にも近き老醫の縫ひ針は使用せざること幾年間、錆が甚しいので思ふ樣には縫へぬ、幾度か刺しては幾度か透らず、左右侍するもの和尚の苦痛を思ふては覺えず手に汗を握つた、が當の和尚は一向平氣で、笑つて曰く

「恰も惠山が破れ衣を縫ふ樣なものぢや」

と。惠山と云ふのは丘林寺に居る老尼の事である。この一言や我見や我慢では言へぬ語だ。近時膽力養成、心膽練磨の方便として禪に參ずる者が多い。禪の本分は必ずしもそれが目的ではない、けれども和尚の如き境涯に入る事が出來たならば、禪の練膽術も軈ては萬國民を指導するに足るものがあるであらう。

一休に水を浴せし華叟和尚

古來禪門に於て尤も弘く其名を知られ、世俗の人口に膾炙せるものは、達磨大師と一休和尚である。坐禪と謂へば達磨、奇人と謂へば一休と衆人に目されて居る、一休和尚は決して尋常一樣の奇人ではない、非凡の天才に非凡の修養を重ねたる敎界の大偉人である。されば今日坊間傳へらるゝ一生の奇行逸事は禪餘の末端とも見るべきであつて、其眞相は苦學時代に於て之を窺ふべきである。

一休が十七歲より師事せる宋爲禪師は素是れ禪界稀有の老知識、些も世上の風潮に流れず、獨り小菴に閑居して只管に佛祖の行履を行履として居た。一休は禪師の坐下に在つて專一に辨道すること五星霜、不幸にして禪師の遷化に逢ひて恰も盲龜の浮木を失ふが如く、第二の明師を求めんがためには、或は江州石山寺に參籠し、或は苦辛の結果、終に一度は近江の湖水に身を投ぜんとするに至つた事もある。

當時、堅田の禪興庵に逸居せる華叟和尚は大燈國師の法孫であつて、よく其家風を守り室內の嚴正なる門庭の峻峭なる謂ゆる壁立萬仞、時弊を慨して自ら世と交を絕つて靜に湖畔に在つて聖體長養の由を聞ける一休、早速堅田に和尚の門を叩いた。

然るに華叟和尚は堅く門を閉ぢて容れない、再三再四願ひ出たが頑として應じなか

つた。けれども一旦の謝絶に逢うて意志を挫折する如き一休ではない。わが一大事を決すべきは將に華叟和尚あるのみ、故に我れ死すとも此の處を去らずと、決心愈々堅く、夜は露に眠り草に臥し、或時は湖頭の漁舟に投じて一夜を過し、朝になればまた門前に來つて佇み、斯くして四五日を經過する時、華叟和尚偶々檀越の家に赴かんとして門を出て、一休が門前に蒲伏して居るのを見て左右を顧み、無情にも「前日の僧今尚ほ此に在り、早く水を浴せて逐ひ出せ」と言ひ殘して出て行つた。後刻歸庵の時フト路傍を見るに全身濡鼠の如き一休は今尚ほ屹として去らうともしないで居る。

時に此有樣に感じた華叟和尚、眞の法器と內心非常の喜悅、直ちに面談を試みしに果して尋常一樣の禪僧ではない、爾來師弟の契りを結んで一休接得の大任に方つた。時維れ應永二十二年一休和尚二十二歲の時である。

爾來、辛辣なる華叟の會下に在つて孜々兀々參究辨道すると前後九ヶ年。全く大死底の修行を經て再活現成、波瀾縱橫の禪機を隨所に活現するに至つたのである。

默童禪師と稻荷の檢査官

曹洞宗大本山永平寺第六十五世、勅特賜慧光玄照禪師福山默童和尚は、不幸にして住山後一ヶ年に滿たず、未だ晋山の式をも擧げざるに遂に遷化せられた。

龍蛇を定め玉石を分つは禪家日常の機略なりとは謂へ、突嵯の間に處しては多くの場合手忙脚亂の醜態を演ずるものが多い。今、禪師一代の蹤蹟を見るに、白浪滔天平地に起るが如き奇談は殆んどないが、無齒の大蟲能く機を見るに敏なると其膽力の不動とは將に後學の規範たるべきものが多い。一體禪師と稻荷樣とは不可分の關係がある、豐川稻荷と云へば海內に鳴り渡つた祠堂であつて、其賽錢も年收幾萬、曹洞宗中隨一の福の神である。稻荷樣が佛神何れに屬すべきかは別問題であるが、兎に角伏見稻荷は神樣として內務省神社局の扱、豐川稻荷は佛樣として文部省宗敎局の支配と云ふのは頗る妙な話だ。併しこの豐川稻荷を佛樣の部類に編入せしめたのは福山禪師

一世一代の大功偉勳として稱揚せられて居る。

頃は明治初年、神佛混淆分離問題の喧しかりし折柄、敎部省の檢査官が御神體改めと云ふので、豐川稻荷へも臨檢に來た。妙嚴寺では上を下への大騷動、この福の神一朝にして神樣たらんか妙嚴寺の生命はない、死活の分岐點に立つたる一山の役寮等しく頭を蒐めて評議した。此際、禪師は悠然として衆議を總括し自ら實行の任に方り、稻荷とか神とか書いたものは一切撤廢して悉く吒枳尼天と改めた。準備萬端を整へて臨檢を受けた所が、御本尊は白衣の老人が稻を荷つて居られたので、檢査官は「これは神なり」と主張する、禪山禪師は吒枳尼天の說明をする、兩々相對して相讓らず、終に後日沙汰をする事にして檢査官は引上げた。而も禪師の說の通り今日に至るも吒枳尼天を以て妙嚴寺の寶庫と成つて居る。この一場の閑葛藤能く禪師の機略を語つて居るではないか。

牛頭山の法融禪師

向上の一路千聖不傳、祖門の道程は等閑の修行を以て進むことは出來ぬのである。されば支那に於ける有名なる曹山大師も行脚の際は一僧の爲めに修行の眼目を示された事がある、そは金石も鎔かさるゝ如き炎天に方り「恁麼に熱す什麼の處に向つてか廻避せん」と問はれた、僧云く「鑊湯爐炭裡に廻避せよ」そんなに熱いかさらば炎々燃え上る爐中に沸り切つて居る熱湯の中にでもお入りなさい、と云ふ惡辣なる接得振、斯うして禪家の僧は鍛へあげらるゝのである。

今は昔、支那牛頭山の法融禪師は道譽四百餘州に響いた大德であるが、其修行時代は常に石室に籠つて這箇の一事を究明して居た。然るに四祖大醫禪師が牛頭山に何時も奇異の雲氣を催して居るのを望んで、こは必定偉人が居るに相違ないと考へ、親ら山に登つて見た。途中一僧に逢うたので「此山に修行して居る道人は居らぬか」と尋

ねた。僧云く「既に出家兒なれば誰か道人ならざるものぞ」と一本きめこんだ、禪師は「成程出家兒は道人に相違ないが、その道人中の眞の道人は誰だ」と詰問された、僧無言のまゝ往き過ぎた。大醫禪師は次第に山を登つて往くと、又一人の僧に逢つたので前のやうに問うた、僧答へて曰く「玆を距ること十里、一人の衲僧ありて修行中である」と、聞いたので、往きて見るに果して一人の道人が石室に端然と坐して居た。

これが即ち法融禪師であつた。「此處に在つて其麼をか作す」と四祖が問ふたれば「觀心をなす」と答へた。「畢竟何人の心、何人の物を觀ずる積りであるか」と問うた。今度は何とも答へずに起つて禮拜し「大德は何處に在り何處より來りしぞ」と問はれた。四祖曰く「貧道は住所不定で或時は東に或時は西にある風來坊だ」と答へた。法融禪師不思議な顏付をなし「師は道信禪師を識るや否や」道信とは四祖大醫の諱である、今面前に在るは其人なりと知らずに尋ねて居る。「何を以て他を問ふや」法融曰く「われ師の高德なるを聞き一度相見の禮を執らんことを欲す」と云つたので、「其お尋ねの道信は衲の事ぢや」と聞いて屹驚、直ちに弟子の禮を執り、爾來、大醫禪師も共に小庵を盤結して坐禪をして居た。附近には猛虎の嘯きが風に和して響いて來る、深林に於ける夜來の雨は益々靜寂を加へるのだ。法融禪師は只管に修道三昧、遂に大醫禪師の法を嗣いで大いに玄風を皷揚するに至つた。

大入道狐わなに罹る

前代議士大原義剛の友人に一人の洒落な禪僧が在つた。和尙は福岡在のある貧乏寺に住して少數の檀家の施物を唯一の生命として細き烟を揚げて居た。施物なき折には近郊を托鉢して數日の粥飯を打するを常としたが、元來無頓着な和尙とて托鉢に出るのも面倒なりと、ある日一策を案出し、隣家の垣根に大穴を開け置き、夜な〳〵其處から潛り込んで、畠の蔬菜を偸み來つては、人知れず庫裡に擔ぎこんだ。隣家の老爺和尙以上の風流人、之を見て、一夜密に微笑み、其頃地方で流行つた打詰わなと云ふ

ものを仕掛けて置いた、わなは生えたまゝの大竹の末に綱を施し、引撓めて地に到らしめ、綱の一端をわなに結びつけて、觸るれば挾み擊つて中天に吊上げる裝置である。

かゝる計略あるとは夢にも知らず、和尚は例によつて又穴を潛り、既に彼方に這ひ出やうとする途端、忽ち其機に觸れて兩脚を挾まれ、ピンと空中に撥上げられた。

この有樣を物蔭に隱れて眺めて居た其家の老爺、繫つた動物は犬に非ず、猫に非ず、狐狸にもあらずして六尺豐かな大入道。兩手を垂れて大地に生へて居るものを手當り次第握つては此窮危を脫せんとしたが、生憎手の觸るゝ所悉く寸莱ばかり、漸く攫めば直ちに拔け、此邊一帶二坪三坪の蔬菜は悉く拔き盡した後、僅かに手に觸れたのは一本の大根、こは忝しと後生大事にそろ〳〵と取絶り、やつとの事に兩脚の綱を引きほどき、ほう〳〵の體にて逃げ歸つた。

翌朝、和尚門前を掃除して居ると折柄通りかつつた隣家の老爺、

「和尚樣、今日は結構なお天氣で……、どうも近頃は大きな狐が出て困りますが、お寺に別條はありませぬか？」

にやりと笑つて行つて了つた。和尚果して如何なる挨拶をしたであらう。

一日作さゞれば一日食はず

禪門規範の大成者として有名なる支那の百丈禪師は、又言行一致の大德として古今の龜鑑である。元來禪家に於ては「作務」と謂つて寺門の內外は申すまでもなく、三度の粥飯を打する米穀類より薪炭の果に至る迄悉く一山內の衆僧が自ら手足を勞して、決して他を煩はさない。特に支那に於てこの風が尤も顯著となつて居る。

百丈禪師は凡そ右の如き作務のある毎には必ず衆に先だつて庭に下りた。四十五十の年齡なら兎も角、八十の高齡になつても依然として大衆と共に作務を持續したのである。一日この有樣を見兼ねた一同は協議の結果、禪師が作務に用うる鍬を隱して了つた。すると禪師は其日から食膳を勸めても一切箸を執らぬ、來日も亦斯の如く、終

に食を取らざること三日、弟子等再び議して「これ必定師の鍬を隠せしに因るならん」とて直ちに鍬を舊の所に置いた。すると禪師は欣然として鍬を肩にして堂後に行き、菜圃を耕耘して室に入つた。弟子食膳を進むるに即ち箸を取つて喫べること平日の如しと。弟子合掌して問うて曰く、

「師食せざること既に三日、夫れ何に因るか、弟子等甚だ之を懼る」

禪師破顔微笑して曰く、

「一日作さゞれば一日食はず」

この一語實に現代人には頂門の一針ではないか。苟も禪の何たるかを味はんとするには是非共、この覺悟がなくてはならぬ。

黄檗鐵眼禪師の大藏經

徳川時代に於ける傑僧として聞こえたる天海僧正は學力の優秀なるのみならず、事業の經營者として公邊の歸依甚だ厚く、異數の待遇を受けて居た。一度發願して我國に一切藏經の版なきを憂ひ木製の活字板を以て藏經を印刻せんとしたが、終に不成蹟に終つて了ふた。この有樣を見て蹴然起つて苦心慘憺、終に藏經の版木鏤刻を大成されたのが黄檗の鐵眼和尚である。

鐵眼諱は道光、肥後國益城郡に生れた。本と眞宗の僧なりしも、明暦の初め、黄檗隱元禪師の來遊と共に禪師に事へ、次で木菴禪師の室に入り其印可を受け、全く黄檗宗の人となつた。寛文三年「楞嚴經」を鄕里肥後の禪定寺に講じ、其翌年「法華經」を筑前の妙光寺に說き、一日慨然として聽衆に對し、左の通り述べた。

「我國は古來佛教國なりと稱すと雖も、唯是れ伽藍及造像の業のみ盛んにして、未だ大藏經の版木なし、かくの如きは三寶中の一を缺きたるもの也、豈一國の恥辱にあらずや、己れ不敏なりと雖も、今後誓つて此業に從事せん」

と、和尚はこれより大阪に出て、常に講席を開きつゝ專ら此計畫に苦心しつゝあつた

のてあるが、寛文八年、大阪月光寺に於て「起信論」を開講しつゝ、例の如く刻藏の事を述べた。然るに聽者の中に觀音寺の妙宇道人と云ふ奇特の人があつて、和尚の盛擧と意志に感激し、金一千兩を即納した。これ實に事業成功の端緒であつた。和尚は喜びこの一千圓を受け、早速黄檗山に奔り、隱元禪師に事實を告げた、禪師も亦非常の喜びて、自身所藏の藏經を與へ、以て印刻の原本となさしめ、山内の勝地を選び、藏版の置場となさしめた。

和尚は又印房を京都に開き、まづ數十函を刻して既成のものは之を黄檗山内に納む る事にした。爾來或は江戸に或は九州に、東西に奔走して淨財を募つたのであるが、漸く得て將に京に還らんとするに方り、宇治川畔凶作のため人民飢餓に泣いて居る、和尚は直ちに囊中の全部を投じて細民を救濟した。更に勇奮十數年を經て漸く所定の淨財を得、延寳六年を以て明藏六千七百七十一卷を刻し終り、其版木を黄檗山内三棟の寳藏院に積み上げた。世に黄檗版と稱する藏經の版は即ちこれである。三衣一鉢の身を以てこの大事を成し遂げし和尚の願心、二十年一日の如く專心努力したる健氣の意氣は蓋し現代人の好箇の針誡ではあるまいか。和尚は天和三年三月廿三日、五十三歳で遷化された。刻藏成つて將に五年目である。

古人の難行を範とせよ

奢侈に流れた現代の惡感化を蒙れるためか、近來は禪門の僧侶までが、兎角贅澤の風がある。苟も古聖先德の難行を範とし、その大迷大悟に鑑みたならば、大いに發奮せなければならぬ。迷うて迷ひ拔けば、其處に忽然として相通ずる所があるであらう。承陽大師は

今人を以て古人に比すれば九牛の一毛に及ばず、此の少根薄識を以て、縱ひ力を勵まして以て難行苦行に比するも、猶古人の易行易解にだも及ぶ可からず。

と示された。寧なり、昔雪峰は三到投子九至洞山と、即ち三度投子禪師に參じ、九度

洞山悟本大師に就いて刻苦奮勵された。近代に於ては西有穆山禪師の如き、駒込栴檀寮時代には洗濯するにも一枚の着換を持たなかつたと云ふ。又森田悟由禪師は奕堂禪師の會下に在つて、三衣一鉢、赤貧の間に刻苦せられたと云ふ事である。この大修行が眞に禪門の生命であることを知らねばならぬ。

丹田の修養に努められし鈴木充美

王政復古、明治維新の風雲に乘じ、一躍して僥倖の名を成し一擧して奇利を博せし徒は、兎角後進を惑はす場合が多い。然るに居士の如きは全く學術と經驗と更に幾段の禪的修養とによつて、今日の名望を得たる點に於て實に成功者の模範と謂はねばならぬ。

氏は安政元年六月、伊勢舊神戸藩士の家に生れ、幼時舊侯の小性役に擧げられ維新後藩の選拔を以て東京遊學を命ぜられ、慶應義塾に入學した。然るに幾ばくもなく藩費廢せられ、學費續かずして塾を去り、淺井某氏の食客となりて寸陰を惜み書を繙き、勉勵苦心の結果淺井氏もその篤學に感じ、再び塾に通學することを得るに至つた、卒業。後東京大學法學部に入り、明治十四年法學士の稱號を受け、直ちに學習院講師に推薦せられ、前後四年同校の攝理に努め、爾來領事として韓國釜山浦に在勤し、歸朝後本所銀行頭取に擧げられては實業界の名望を成し、衆議院議員としては自由黨の重鎭を以て目せられ、一度び憲政黨內閣成るや內務次官の要職に擢任せらるゝ等、氏の官歴は暫く措き、超脫の氣風は終に政界を去つて民間に下り、赤裸々たる一个の辯護士として專ら丹田の修練に心を傾け現永平貫首日置默仙師の門に參じて、氏の人格は遺憾なく發揮さるゝに至つた。

閑雅なる麻布の邸宅、その應接間には達磨の立像が仁王然と入口に力んでゐる、氏は從前より洞門の禪に參じて、所謂野狐禪者流に一異彩を放つて居られた。

「禪に參ずれば必ず健康を得ることゝ信ずる。それが證據に達磨大師は百二十歳の高

齡、而も健固な身を提げて遙々支那に布教に來られたと云ふてはないか、これが單に身體ばかりてはない、精神も之に伴はなくてはならぬ。身心共に健全に發達するところ初めて安樂の法門と云ふことを得るのてあらう。」

とは氏の持論てあつて、飽迄も攻究的な眞面目の態度は又演壇上の人として聲望ある所以てあらう。清楚なる日本室の書齋には、禪門の老宿故西有穆山老漢の筆になれる一軸『大海隨魚躍。長空任鳥飛』と氏が濶達の氣風を傳へて遺憾なしと云ふべきてある。

桃花一見豁然大悟

往昔靈雲志勤禪師、一日遊山して山の麓に休息して居た。頃しも春の好時節、霞靄く對向の丘には今しも桃の花が一面に咲き競うて居た。アー奇麗だナと思ふた、其一刹那に豁然として大悟した。

この一場の葛藤はよく禪家の話題になる有名な縱蹟てあるが、禪の大悟を以て易々たる閑消息と思はど、大なる誤りてある。靈雲禪師はこの時既に三十年一日の如く辨道修行三昧、遊山と云ふも兀坐中の經行に過ぎぬのだ。心に一點の油斷なければこそ桃花を一見しても、此事を了ずるに至つたのてある。されば其時の偈に

三十年來尋劍客、幾回葉落又抽枝、
自從一見桃花後、直至如今更不疑。

と云ふてある。朗々吟詠して以て其心中を察するに足るてはないか。三十年來劍を尋ねて然も落膽幾回、今日桃花を一見して漸く寶劍の所在を知つたと云ふのてある。

西郷南洲の活作略

一刺客あり、大西郷を薩摩に訪はんと企て、勝海舟の許に至り紹介狀を請うた。海舟早くも其胸中を察し、快諾して一書を認めた。曰く「此豪傑は貴下を刺殺さんと欲

す、隨分御用心然るべく候、以上」と。客斯る文面とは露知らず、得々として薩摩に赴き、私學校に至りて桐野利秋を經て南洲翁に相見した。先づ開口一番、天下の大勢を論じて滔々數千言。翁聞き終り答へて曰く、

「先頃、城山に狩して大に獲物あらんと思ひ、唐芋二百文を買うて兵糧を整へ、山中を馳せ廻ると一日、遂に何物も獲なんだ。不圖腰間を探ると何ぞ圖らん嚢中悉く空しくなつて居る、これ野狐の仕業と憤慨したが、思へば吾輩も老いたよ、狐狸に玩弄さるゝ樣になつては人間も最早駄目だ、天下の大勢などは思ひも寄らぬ、よろしく貴殿の如き青年者を待たねばならぬ」

と呵々大笑して餘念なきものゝ如くであつた。流石油斷を附け睨らうて居た刺客も、害心を失うて愴惶歸路についた。利秋は復書を裁して丁重に海舟への謝辭を述べたが、客は海舟の許に至つて南洲老耄の狀を語つて頗る得意の有樣であつたと云ふ。

逃がす秘傳あれば遁ぐる奥の手もある、殺活自在は禪の本領、南洲曩に無三和尚の棒下に參じて既に此事を領得して居た。

大火焔裡に示寂せる快川和尚

快川和尚諱は紹喜、濃州土岐氏の出である。仁岫禪師の室に入つて法を嗣ぎ、歷參刻苦具さに嘗め、禪機俊嚴、氣宇活達、皺に禪僧としての好典型であつた。妙心寺に出世して濃州神護山崇福寺に住し、雲兒水弟を接得して道譽一時に高かつた。其後、崇佛參禪の賢君として知られたる、甲斐の國主武田信玄の屈請するところとなつて、國中第一の禪刹たる慧林寺の住職となり、活棒裡に禪要を提撕した。信玄益々其道力を敬ひ、和尚を遇するに極めて懇篤を極めたが、不幸にして天正元年四月陣歿した。

嗣子勝頼は父に似ざる羸弱の質、機を見るに敏なる織田信長の襲ふところとなり、武田家の運命は將に風前の燈火、多年信玄の恩顧を受けし國中の禪僧は其善後策を講ずべく道譽一國を掩ふ快川和尚の許に參じて密議を凝らした。これが累をなして、織

田九郎次郎を初めとして幾百の織田勢、一時に慧林寺を圍んで、一山の衆僧一人殘らず山門に追ひ上げ、梯子を外して、門前より持ち來りたる草屋を其下に積み、四面より火を放つて一同を燒殺さんとするのである。

忽ちにして紅蓮閃めき、黑煙渦まきて慧林寺の門頭は時ならぬ焦熱地獄と化した。和尚は火焰燃え熾る其中に泰然と坐して、最後の垂語を下したのである。

諸人即今火焰裏、如何轉大法輪、各々著一轉語、
爲末後句。

と、言は沈痛悲壯である。生死岸頭の實際問題、今將に火定三昧に入らんとす。衆皆下語す。和尚聞き了つて破顏一番。

安禪不必須山水、滅却心頭火自涼。

と、語將に盡きて、猛火既に衣を燒く。和尚は泰然不動、斯くして大火定三昧に化寂せられた。戰國の師家に相應しき一大活機輪ではあるまいか。

悟由禪師と虛空藏菩薩

森田悟由禪師は禪門近代に稀なる高德であつた。天保五年尾州知多郡大谷村に生れ、刻苦精勵、永平寺貫首となり、齡八十を超ゆるも其性己を持すること極めて嚴正、人を待つこと甚だ寬厚、一度禪師に接する者は僧俗共に其德を稱せざるはなかつた。特に故伊藤博文公の如き大に禪師を尊信して居た一人である。隨つて其間に於て種々なる逸話も多くあるが、中にも大井村の恩賜館を賜はりし時などは、公は先づ第一に禪師の室を叩き、御下賜の御書附を示された。又或日、常に護持する所の萬里小路藤房卿の念持佛と傳ふる一軀の虛空藏菩薩を將來して曰く、

「こは不思議の因緣により余が手に入りたるもの、嘗て雲照律師に請うて開眼したるが、爾來守護佛として身を離さず所有したりしに、近來菩薩の右手に持し玉へる寶劍を失ひ、佛師に命じて修造するは易々たることなれど、願はくは禪師余が爲めに

寶劍を授け玉へ」

との依頼であつた。禪師は快諾の上早速寶劍を造らしめて、左の記文を添へ公に與へられた。

伊藤侯爵閣下念持虛空藏菩薩寶劍再製記　明治四十年一月晦日、侯君辱なく幣盧を訪はれ、多年珍藏する所の遁隱士侃山翁念持の虛空藏菩薩を示さる、實にこれ稀世の靈像也。因みに曰く、余偶々菩薩執持する所の寶劍を失ふ、幸ひに補ふ所あれと、乃ち靈像を野衲に托せらる。直ちに工に命じて之を造らしめ、薰沐禮誦、恭しく供養を伸べ、特に閣下に趨り謹んで之を呈す。

夫れ虛空藏菩薩は大莊嚴國に住し、福德威力を以て衆生を攝取し、智慧辯才、寬廣無礙、猶ほ虛空の如し、能く諸佛の正法藏を護持して、常に無量の功德財を運出す、依て大虛空藏と號す。楞嚴經に曰く、手執四大寶珠、十方微塵佛刹、化成虛空、乃至身同虛空、不相妨礙、大集大虛空藏菩薩、所問經に曰く、以大福德及大威力、而自莊嚴、獲無礙智、以相好莊嚴於身、以辯才莊嚴於語、以勝定莊嚴於心、以多聞總持莊嚴於念、以平等捨莊嚴於實、云云、加旃、菩薩は能く闇瞑を離れ能く神通を現はし、能く纏蓋を除き、能く魔怨を伏し、諸々の有情に於て宜しきに隨つて法を說き、諸道の中に於て爲めに正路を示す、故に如意珠は以て恩德を表す、寶王劍は以て智斷を表す、惟ふに楠氏の忠、侃公の節、三德二嚴、自ら其中に存す、誰か菩薩一分の權化にあらずとせんや。今や侯君の勢望威德古今に卓越す、而して常に此靈像を念持して暫くも相離るゝこと無し、豈亦虛空藏裏の大士にあらざらんや。

明治四十年二月八日　永平住持悟由謹識

と、以て禪師慈愍の垂手と公の信仰とを窺ふに足るではないか。予が自坊米澤市照陽寺は上杉管領憲政公の開創にかゝり、憲政公一代の守護佛たる福滿虛空藏菩薩を祀りて境內の鎭守となつて居るが、星霜茲に四百年、今日尙ほ朝夕參拜者の跡を絕たぬのである。予常に菩薩の威神力を信奉し讃歎措かざる矢先、計らず禪師の公に致せし

右の記文を得た。依つて之を錄して普ねく十方有緣の士に法供養を試みし所以である。

和漢古今禪門佳話終

大正六年一月廿五日印刷
大正六年一月廿八日發行

禪門叢書第九編
定價金壹圓

著作者　菅原洞禪
發行者　高島大圓　東京市小石川區原町六番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地　振替口座東京一五六八六　電話番町二六〇八　丙午出版社

文學博士　村上專精先生新著

眞宗全史

正價金三圓
郵稅十六錢

博士多年苦心の大作
菊判約九百頁の大册

▲親鸞聖人の偉業たる眞宗の歷史を說けるの書、部分的及び個人的の者は其數決して少からずと雖も、其の全般を詳述せる綜合的歷史は、實に本書を以て嚆矢となす▲本書は竪に古今を貫き、橫に十派に涉り、奈良、平安の古に於ける淨土敎の起原よりして、明治大正の佛敎の現狀に及び異說異傳を取捨して系統脈絡を分明にし、傳敎、慈覺、空也、源信、良忍、覺鑁、法然、親鸞、蓮如、其他諸上人の事蹟は固より、東西本願寺其他本山諸寺の變遷關係等に至るまで、一目の下に之を瞭然たらしむ▲殊に明治以後に於ける佛敎界の情勢を通觀すべき何等の著述なき今日著者は其點に於て、多大なる寄與貢獻を爲せり、廢佛毀釋の問題の如き其の主要なる者の一なりとす▲即ち題して『眞宗全史』と言ふと雖も、實はこれ完成せられたる『日本淨土敎史』なり『日本佛敎近世史』なり▲要するに本書は、其の著者と題目と內容とに於て、眞に貴重なる獨創の大著述として永久の生命を有するものと稱せざるべからず

文學博士　松本文三郎先生閲
文學士　羽溪了諦先生著

釋尊の研究

定價金壹圓
郵稅金八錢

本書筆を釋尊以前の婆羅門敎の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に敎界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

井上哲次郎博士序　橋惠勝先生著

佛敎心理の研究

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

著者は佛敎の研究に於て一家の見を樹てたる篤學の士にしてその論議往々にして先人未到の境に入る本書は多年研究の結果に基き西洋の心理學以外別に佛敎心理學の可能を論定し彼此對照以て佛敎心理の微を闡き細を穿つ今此の新研究の發表は蓋し學界の幸慶ならずとせず

文學博士　松本文三郎先生著

佛典の研究

定價金九十錢
郵稅金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十種加ふるに軼近燉煌その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新說なりとす佛典の眞僞を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

文學博士　松本文三郎先生著

補增 宗敎と哲學

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書全篇十有四章まづ筆を「釋尊は何を說きしか」に起し「宗敎と道德」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗敎の基礎は哲學的論據に在ることを說明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

マクス、ミュラー博士原著
文學士　清水友次郎先生譯

宗教學綱要

定價金五十五錢
郵稅金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミュラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校教授
文學士　野々村直太郎先生著

宗教と倫理

定價金五十錢
郵稅金八錢

正にとれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に惱める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ、附錄には二宮尊德翁の宗教論を評す

眞宗補教　北條瑞麟先生著

眞宗の教義

定價金二圓
郵稅金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其賢蓮如上人との教義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力教の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

文學博士　村上專精先生著

眞宗全史

正價金三圓
郵稅十六錢

▲親鸞聖人の偉業たる眞宗の歴史を說けるの書、部分的及び個人的の者は其數決して少からずと雖も、其の全般を詳述せる綜合的歴史は、實に本書を以て嚆矢とす▲本書は堅に古今を貫き、横に十派に涉り、奈良、平安の古に於ける淨土教の起原よりして、明治大正の佛教の現狀に及び異說異傳を取捨して系統脉絡を分明にし、傳教、慈覺、空也、源信、良忍、覺鑁、法然、親鸞、蓮如、其他諸上人の事蹟は固より、東西本願寺其他本山諸寺の變遷關係等に至るまで、一目の下に之を瞭然たらしむ▲即ち題して『眞宗全史』と言ふと雖も、實はこれ完成せられたる『日本淨土教史』なり『日本佛教近世史』なり

文學博士
文學士　高楠順次郎先生
木村泰賢先生　共著

印度哲學宗教史

定價金貳圓
郵稅金八錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を增補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵、書、奥義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を說述して盡さゝるなきもの苟も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらんむと欲するものは須くまづこの秘鑰を握らざるべからざるなり

文學博士　高楠順次郎先生閲
文學士　木村泰賢先生著

印度六派哲學

定價金二圓卅錢
郵稅金十二錢

六派哲學（數論、瑜伽論、勝論、正理論、聲論、吠檀多）は印度哲學の代表的思潮にして諸種の論議と學說と一として備はらずと言ふことなし然るに我國未だ之に關して權威ある著述の發表せられたるを聞かざるは眞に學界の一大恥辱なりとす木村先生夙に之を慨し研究多年漸くその完成を告ぐ東京帝國大學に於て之を講ずること二學年其間又多少の補訂を加へて遂に汎く之を世に問ふに至りしなり時恰もタゴールによつて今や更に東京に來りて光輝を放つるや其の如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆する者多き貧弱なる我國の思想界に向ひ本書の如き斯學最高の權威たるべき名著を推薦することを得たるは當に弊社の誇のみならざるも

文學博士　松本文三郎先生著

彌勒淨土論

定價金壹圓
郵稅金八錢

宗教學上殊に佛教史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放つるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋沒によりて全然暗黑に歸すこれ豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の一大地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の舊著『極樂淨土論』と相待つて玆に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛教の淨土思想を談ぜんとするものぞ

トーマス、カービー先生著

英文佛教讀本

定價金五十錢
郵稅金六錢

著者は敬虔なる佛教信者として熱心なる佛教研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛教傳播に盡しゝ狀況及歐米に於ける佛教學者の筆に成れる論文英語に飜譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛教の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の豫見等凡そ二十餘章蓋し佛教學校の英語教科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師 ドクトル 荻原雲來先生著

實習梵語學

定價一圓七十錢 郵稅金八錢

佛教を學ばむとするものは言ふまでもなし印度の文學美術を研究せむとするものも亦梵字梵語を知ることなくしては常に霞を隔てゝ花を觀るの憾なくばあらずしかも邦人にして梵語を學ばむには歐語を知らざるべからざるの不便あり著者常にこれを慨き邦語を以てこれを解説せむことに努力するもの實に十數年而して今や漸く本書成る自今以後英仏二十六章を學を讀み得る程の人は容易に梵字梵語に通達し得べし殊に悉曇十八章を學げてこれに新體梵字を配し一々發音を附したる全く斯界空前の試みにして大に天下に誇示するに足るの事業たり

文學博士 高楠順次郎先生閲
曹洞大學教授 立花俊道先生著

巴利語文典

定價金一圓 郵稅金八錢

著者南天竺楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下にありて巴利語を修むること多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に從ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

茲雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿滿得壽先生著

悉曇阿彌陀經

定價金壹圓 郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡はんが爲なり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

帝國大學講師 ドクトル 荻原雲來先生著
梵漢對譯

佛教辭典

定價金五圓 郵稅金十二錢

本書收むる得顯密二教の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地儀山川草木飲食器皿數方時より動詞副詞に至るまで語數甚だ豐富にして單に佛教辭典としてのみならず又梵漢辭典として未曾有の寶藏なりこれを以て佛教を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取りても亦唯一無二の寶典たり

豐山大學長 權田雷斧僧正述
兩部

曼荼羅通解

（挿圖十八葉）
定價金二圓五十錢 郵稅金八錢

兩部曼荼羅は密教の根本思想とその實踐の理想とを圖畫に託して顯示したるものにして密教の骨髓眞言の極致佛教藝術の精華これを外にして求むべからざるなり然るに斯教由來口訣を重じ面授を尚び堅く神秘の關鑰を鎖して容易に門外の窺窺を許さず學者頗るこれを遺憾とす於乎昨秋有志相謀り大阿闍梨權田雷斧正を請じて曼荼羅の講傳を受く弊社今切にその講錄の修正補訂を請ひ玆にこの千古の秘藏を開放するの光榮を得たり學界の慶事と言はずして何ぞや

東洋大學教授 境野黃洋先生著

佛教史論

定價金一圓三十錢 郵稅金八錢

親察の脅拔と論斷の明快とを以て佛教史界の權威たる著者が椽大なる史筆を驅つて印度支那日本の佛教が過去三千年間に於ける重要の問題十有數條を研究してこれに快刀亂麻を斷つの結論を與ふ殊に「正確なる事實に基いて自分の立場を定めると同時にどこまでも佛教宣傳の精神を離れざる所」著者の窃に誇りとする所にして又最も尊重すべき態度なりとす

東洋大學教授 境野黃洋先生著

活ける宗教

定價金一圓二十錢 郵稅金八錢

著者が限りなき渴仰と量りなき崇敬とを拂つて居る日本佛教の代表的偉人中特に聖德太子 傳教大師 弘法大師 法然上人 日蓮上人 道元禪師 親鸞上人 蓮如上人 白隱禪師の人格と教義と信仰とを精叙したもので正にこれ一部の「列傳體日本佛教史」である しかし世間に有りふれたる冷かな抽象的な人間の血の氣の通つて居ない學究的なものではなく此等の偉人が親しく體驗したる內的生活の上に活躍して居る眞の宗教を語つたものであることによつて佛教の大意もわかるし述全なる佛教の信仰も理會せられる

帝國大學教授 文學博士 高楠順次郎先生著

佛教國民の理想

定價一圓廿錢 郵稅八錢

本書は國民の理想宗教の理想人格の理想を闡明したる快著也第一編は曾て公にしたる一國民と宗教一にして國民の地位を自覺せしめんが爲に國民性を中心として信仰と修養とを說き第二篇は新に試みたる「佛教の地位」にして人格の理想を自覺せしめんが爲に佛教を中心としてその信仰に新生命を附與し實生活に於ける眞宗教の地位を明にし第三篇「久修十題」は研究と修養とに關する諸問題を解說せり敢て輕浮なる現代の傾向を快しとせざる人士の精讀を切望す

ポール、ケーラス先生著
學習院教授鈴木大拙先生譯

阿彌陀佛

（品切）　定價金三十五錢　郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛敎の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評喧々たることや弊社曩に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり登壇に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
文學士　常盤大定先生著

釋迦牟尼傳

（品切）　定價金七十錢　郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳說の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士　遠藤隆吉先生著

孔子傳

定價金壹圓四十錢　郵稅金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその觀察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未曾の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
耳理章三郎先生著

王陽明

定價金一圓五十錢　郵稅金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學說とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學教授　境野黃洋先生著
增補

聖德太子傳

定價金五十五錢　郵稅金八錢

佛敎史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛敎の敎主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政敎習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

平子鐸嶺先生遺著

補校上宮聖德法王帝說證註

正價金一圓　郵稅金八錢

『上宮聖德法王帝說』はその記事切實その文詞醇古多く寧樂已往の記錄を取つて正史の闕を補ひ說に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須ゐず而して狩谷掖齋先生の『證註』に至つては群說を折衷し正邪を辨別して先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽强記にして史眼犀利掖齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足らざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

大內青巒先生序
高島米峰先生著

一休和尙傳

定價金九十錢　郵稅金八錢

元日に髑髏を振廻はして人の度膽を拔き末期に糞を睹つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうとも せず一笠一笻ただ平民的敎化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

文學博士　三宅雪嶺先生著
增訂

偉人の跡

定價金壹圓　郵稅金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として玆に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか此會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

學習院教授
帝國大學講師　鈴木大拙先生著

スエデンボルグ

定價金五十錢
郵稅金八錢

神學界の革命家、天界地獄の遍歷者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身に集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教說にして救濟には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸說を簡明適切に述べたる快著

スエデンボルグ著
鈴木大拙先生譯

新エルサレムと其教說

定價金六十錢
郵稅金八錢

本書は天界地獄の遍歷者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披歷したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より說き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔、斷案透徹、譯筆明快

スエデンボルグ著
鈴木大拙先生譯

神智と神愛

定價金一圓五十錢
郵稅金十二錢

『神慮論』はスエデンボルグが玄奧神祕なる宗教を知るべき一大著述なり『天界と地獄』は現世と離れて離れざる心界を描出し『神智と神愛』は絕對無限性の神德を說破し而して『神慮論』は實に此の神德が萬物の上に現はるゝ所以を詳述したるものにして天界地獄の遍歷者神祕界の大王神學界の革命家たるス氏の所說を知らむと欲する者は本書を讀め

スエデンボルグ著
鈴木大拙先生譯

神慮論

定價金二圓拾錢
郵稅金十二錢

文學士　渡邊又次郎先生著

最新論理學

定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要なる題目を揭げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

『萬朝報』記者　大住嘯風先生著

現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまた其の思想の由來せる傳說を究め進んでゼームス、オイケン、ベルクソンの如き現代思想を代表する大思想家の說くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遂なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

醫學博士　岡島狂花先生著

現代の西洋繪畫

定價金一圓六十錢
郵稅金十二錢

岡島博士多年研鑽の所得を組織して玆に此の書を成すその內容の概略を摘記せむか。一、代表的名畫三十二葉を挿入したる事二、從來ありふれたる氣分的斷片的文集にあらずして科學的の著作なる事三、現代西洋十六ケ國の繪畫を取扱ひたる事四、筆を太古の繪畫史に起し古き傾向より未來派、色彩象徵派、立體派より昨年分れたるオルフイズムに推移期に入り進みて新しき傾向即ち印象派、新印象派、後期印象派、至るまで悉く精叙して盡さゝるなき事五、一千餘語の原語索引を附したる事六、現代の版畫を七節に分ち廣告畫にまで論及したる事

文學博士　三宅雪嶺先生著

小泡十種

定價金四十五錢
郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩瀚盡きざる大河となり散じては續紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

文學博士　井上圓了先生著

活佛教

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は本書を以て成完を告ぐ自今以後僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛教をして活佛教たらしむるの福音

文學博士　井上圓了先生著

南半球五萬哩

定價金九十錢
郵稅金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峽まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十錦上更に花を添ふ

文學博士　井上圓了先生著

妖怪叢書

特價八拾錢
定價金壹圓
郵稅金八錢

井上先生の妖怪研究に於ける殆ど半生の事業たりこれを以てその假怪僞怪の正體を暴露し來つて遂に眞怪の不可思議を闡明するところ誠に天下獨歩にして何人の追隨をも許さざるなり或は『哲學うらなひ』といひ或は『改良新案の夢』といひ或は『天狗論』といひ或は『迷信論』といふ悉くこれ先生の蒐書を傾けたるものならざるなし今この四論を合せて此の叢書完成す世の奇を好む人怪を厭ふ人共に本書に就いてその眞相を看取せば庶幾くば直に無不思議の妙境に到達し得む

文學博士　井上圓了先生著

おばけの正體

定價金五十錢
郵稅金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者凄い者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の眞相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聽きたがる小供のためにも「幽靈の正體見たり枯尾花」などゝ悟つたつもりの大人のためにも「幽靈の正體見たり枯尾花」などゝ悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

前外務大臣　伯爵
林　董閣下　纂譯

修養の模範

定價金七拾錢
郵稅金八錢

前外務大臣　伯爵　林董閣下序
文學博士　澤柳政太郎先生序
機關所　千河岸貫一先生著

修養史譚

定價金壹圓
郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に因り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譚の乏しいのに困りて青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを嘆いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を飜譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたるものにして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母とれを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

澤柳文學博士特に長文の序を草す其の一節に曰く、ジョルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を待たず――我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

スタンフォルド大學總長
ジョルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ
中村平先生譯

人物の修養

定價金五十錢
郵稅金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記述法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡德邪僻の鞭朴人格完成の砥礪立身處世の指導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年卿等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕庫を開くべき鍵はこゝにあり

ウヰリアム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
修養處世

自己測量

定價金五十錢
郵稅金八錢

文學博士　村上專精先生著

通俗 修養論

定價金壹圓
郵稅金八錢

古聖賢儀の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規範とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を說明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐錄して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる周到完備の修養書たらむなり

文學博士　村上專精先生著

改訂增補 自信錄

定價金六拾錢
郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまゞ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節說いて至らざるなし進歩せる佛敎學者の見解は此書によつて知るを得べし

文學博士　村上專精先生著

誠のしるべ

定價金四拾錢
郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗敎も道德も敎育も凡て此の根柢の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳述せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士　村上專精先生著

女性訓

定價金四十錢
郵稅金六錢

本書の內容は天職中庸貞素謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子敎育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を攬み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

黑岩周六先生講演

人生問題

フエヒネル先生原著
文學士　平田元吉先生譯

定價金七拾錢
郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を說き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黑岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て玆に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人遠に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することを得ん

死後の生活

定價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豐富なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず

西川光次郎先生著

最新健康法全書

定價金壹圓
郵稅金八錢

著者は現代行はるゝところの最新の强健法及治療法に關し、久しく研究を重ねたりしが、今やその中につき、最も有効なりと信ずる、岡田式靜坐法、二木式深呼吸法、藤田式息心調和法、高野式抵抗養生法、川合式强健術、葛田式運動療法、井上仲子の筋骨矯正術、小森式塗擦療法、石塚式食裝法、川面式體育法、アドルフ、ジヤストの土の利用法、ニツプの水の利用法、歐米諸大家の日光療法、各種心理療法等について、その方法と特効とを詳說せり。世の身體虛弱なる人、疾病に惱む人、一度、本書を繙かば、縱令、萬病襲ひ來らむも、敢然としてこれを擊退するの力を援得せむ。

杉村縱橫先生譯編

强肺術と肺病全快談

定價金九十錢
郵稅金八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を繙いて天來の福音に接せよ

文學博士　村上專精先生編

科註原人論

定價金十二錢　郵稅金二錢

科註大乘起信論

定價金十六錢　郵稅金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し假きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

加藤咄堂先生著

原人論講話

定價金六十錢　郵稅金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶄然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨特なる通俗平易の筆を驅つて叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ鑑頭には添ふるに古人の解說を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

明楊起元評註
加藤咄堂先生和譯

和譯維摩經評註

定價金七十錢　郵稅金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲學と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談ぜむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著

通俗講話の理論及方法

定價金九十錢　郵稅金八錢

通俗教育の必要日に迫りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豐富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解說し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば敎化の秘訣雄辯の奧義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繙かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

加藤咄堂先生著

筆と舌

定價金七十錢　郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演說と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る

文學傳士　澤柳政太郎先生著

退耕錄

正價金壹圓　郵稅金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焰あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる篤案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國慨世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

村上博士序
藤井瑞枝女史著

亂れ雲

定價金八十錢　郵稅金八錢

女史は跡見花蹊先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は醒れたる溫情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」首唱者
伊藤證信先生著

新氣運

定價金八十錢　郵稅金八錢

斷然傳習と敎權の束縛より脫却して世の罵詈嘲笑輕侮憎惡の中に立ち愈愈なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

理想的商業

島田三郎先生序
高島米峰先生著

定價金二十五錢
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人屁こ垂れること甚だ道理なし
それ賣るに法あり買ふに道ありこの法を說きこの道を敎へ以てお客樣と
いふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふも
のにはうんと買へと勸め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ち
この書なり

廣長舌

三宅雪嶺先生序
高島米峰先生著

定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峰今胸中書物の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す
其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企だて及ばざる所にして其の論ずる
所は肉を刺し骨を透して當世人士の肺腑を刳る洵にこれ堂々經世の大文
字」と

惡戰

加藤弘之先生序
高島米峰先生著

定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に
加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に
處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處
なきを保せざるべし」と

店頭禪

三宅花圃女史序
高島米峰先生著

定價金八十錢
郵稅金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也
學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鷄犬堂の帳場格子裡に獨り自ら
實參實究したるところの禪也
傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是
れ生活の實驗也信仰の告白也

幸德秋水が最後の文章

基督抹殺論

葊村隱士　久津見蕨村先生著

定價金七十錢
郵稅金八錢

一代の論客として知られたる幸德秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道
を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に呻吟せるの間特に
此一卷を著す所論痛絕快絕行文悲絕愴絕嗚呼幸德秋水死に臨みて基督を
抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり
秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天
下の憎讀を冀ふ

現代八面鋒

葊村隱士　久津見蕨村先生著

定價金八拾錢
郵稅金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之
を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫
理あり藝者あり敎育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗敎あり眞に
これ多角趣味の一大珍書

眞人僞人

葊村隱士　久津見蕨村先生著

定價金壹圓
郵稅金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か痞
癪を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこ
ゝに其面目を揚げ僞人はこゝにその面皮を剝かるその論辛辣その評深刻
洵に筆端風を生じて文に聲あるの慨あり

ニイチエ

久津見蕨村先生著

定價金九十錢
郵稅金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人
中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格
ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學
ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

賣文社長　堺　利彥先生著

賣文集

定價金壹圓
郵稅金八錢

卷頭之飾　著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語　賣文社の記、著者自ら其の事業を語る　第一編　一、唯物的歷史觀　序　二、賣文社の記　三、宗教とは何ぞや　四、木下尙江君を評す　第二編　一、暮春の古服　二、予の夢　三、墓地見物　四、寸馬豆人　五、逆徒の死生觀　六、死の趣味　第三編　一、「谷川の水」（バーナード、ショウ原作）　二、クレンクビュ、大杉榮　三、叛謀人耶蘇、高島素之　第四編　一、告白、荒畑寒村

堺　利彥先生著

自傳　ルソー　赤裸の人

定價金九拾錢
郵稅金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の敎育界はルソーの「エミール」により啓發せらる波瀾重疊神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彥先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

カウツキー先生原著
堺　利彥先生譯

社會主義倫理學

定價金壹圓
郵稅金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗敎界及び敎育界には淺薄にして僞善なる因習道德が唱道せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の昧を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし（譯者）

堺　利彥先生著

樂天囚人

定價金六拾錢
郵稅金六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

東洋大學敎授　土屋鳳洲先生著

晩晴樓文鈔

定價金八十五錢
郵稅金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり說あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊あり銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須ゐざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讃評を加ふ卒然卷を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繙かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

東洋大學敎授土屋鳳洲先生編
評解

唐宋八家文鈔

定價金四十五錢
郵稅金八錢

夫の唐宋八大家交が文章の模範と仰がるゝもの久し奚惜しいかな卷帙浩瀚初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校敎科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

東洋大學敎授　釋清潭先生著

寒山詩新釋

定價金五十錢
郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ讖語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩譚を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學敎授　釋清潭先生著
和漢高僧

名詩新釋

定價金五十錢
郵稅金六錢

本書、漢は唐宋元明淸五朝の高僧に涉り和は虎關以後絕海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの淸秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは曩前なるべし

文學博士　三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢
郵稅金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高壇に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして劈切の結論に到る即今大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の產物なりしかを知悉して依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

文學士　沼波瓊音先生著

此一筋

定價金七十錢
郵稅金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうな方にのみ、これを侑む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

高島米峰先生編

來世之有無

定價金七十錢
郵稅金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するのか滅しないのか元來吾等に靈魂など、いふものがあるのか無いのか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑團も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

大内青巒先生著
結城素明畫伯畫

禪の極致

定價金六十錢
郵稅金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ。古來禪を說くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出づゝ愈々迷はしむることを。大内先生、學深く德高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を說き、深遠の法を語ること、殆ど天下獨步、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附錄「五位頌講話」また先生獨創の見識を以て、縱橫に講解す、蓋近來の大文字なり

黑岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢
郵稅金八錢

進步的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黑岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合する經濟的獨立の實際問題を以てし種々樣々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

東洋大學教授　釋清潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢
郵稅金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠狸詩の窟一掃して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や狡成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

村上專精先生序
高島米峰先生著

噴火口

定價金八十錢
郵稅金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著『廣長舌』『惡戰』等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

『東京朝日』記者
杉村楚人冠先生著

ひとみの旅

定價金六十錢
郵稅金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、專ら現代を寫し、人間を論ず。曾て、洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著

書窓車窓

定價金六十錢
郵稅金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天鎖あり、地鎖あり、人鎖あり、これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の德澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出でゝは車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

バアナードショウ作　堺利彦先生譯

人と超人

定價金九十錢
郵稅金八錢

ショウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れの生命哲學彼の兩性觀彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、ショウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人（松居松葉）等あり

文學博士　村上專精先生著

六十一年

定價金九十錢
郵稅金八錢

これ村上博士が過去六十一年間惡戰苦鬪の活歷史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛敎の盛衰消長及び敎界人物に對する忌憚なき評論は明治佛敎の側面史として敎家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ敎界未だ有らざる自叙傳なり

内田魯庵先生著

沈默の饒舌

定價金八十錢
郵稅金八錢

維摩の一默その犀貫の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈默の境中に一大獅子吼を試み鄙人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を說き生活の難易を敎ふその言の懇切なるその論の穩健なる誠に人間處世の好南針なりとこれを目して饒舌となしてこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方寸の妙諦に參する能はさるもの

帝國大學講師
學習院教授　鈴木大拙先生著

禪の第一義

定價金一圓
郵稅金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特產なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりて拈弄せられ活きたる人生と吟ど沒交涉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を說述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實驗の歷程を精叙しその所得の公案を解說し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除去せむとす不立文字敎外別傳の禪も本書出でゝその近代的色彩の頗る鮮なるものあるを看取し得む

東洋大學長　大内青巒先生著

青巒禪話

定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを威す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を說破し俗話以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の秘奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡聖の如きたゞ讀者の擇ぶところに委するのみ

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著

達磨と陽明

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく道德の工夫修養の方法爲學の用心精神錬磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

新井石禪老師著

修道禪話

定價金一圓
郵稅金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に滿足し邪禪に墮在するもの尠からざるを見て慈心到底默止するに堪へず玆に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不說の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明明

建仁寺派管長　竹田默雷老師著

禪の面目

定價金一圓
郵稅金八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる『默雷禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の說とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

『修養世界』主筆　菅原洞禪師著

禪林奇行

定價金壹圓
郵稅金八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履發剌たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

圓覺寺派管長　釋宗演老師著

拈華微笑（ネンケビセウ）

定價金壹圓
郵稅金八錢

釋尊拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼ばむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を心讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

曹洞大學長　秋野孝道老師著

禪の骨髓

定價金壹圓
郵稅金八錢

以心傳心の禪直指人心の禪そこに何の膚肉ぞ何の骨髓ぞ今吾が秋野老師特に『禪の骨髓』と題して一卷を成す或は言はむ是れ好肉上の剜と爲ぞ知らむ是れ指月の指なることを世の指に執着するものは則ち去れ迷雲一たび拂へば眞如の明月耿々として天地こゝに朗然これ此書を學人に薦むる所以

原僧運老師著

禪の捷徑

定價金壹圓
郵稅金八錢

敎外別傳と說き不立文字と說き而して實參實究を强ふ禪も亦難いかな曷ぞ知らむ語默動靜皆是禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることなきを果して然らば人誰れか禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるものぞ僧運老師八十年の禪生涯その行業直ちにこれ禪の眞諦今爰心默止し難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却て大道坦々として長安に通ずるものあらむ

荒井泯光先生著

道元禪師

定價金壹圓
郵稅金八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慈濟尊師し深く佛陀所說の核心を探り詳に祖師面授の單的を領す而して歸來喝破すらく「空手還鄕」と空手還鄕の那一曲知らず何等の妙調ぞ佛法の要旨玆に存し禪の眞髓玆に盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を描寫するに流麗にして巧妙なる文辭を以てし禪師の風丰面目をして卷中に躍動せしむ通俗にして文學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ讀者これに依つて曹洞禪風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洪範を得べし

曹洞大學教授　原田祖岳老師著

參禪の階梯

定價金壹圓
郵稅金八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀づべからざる底の禪に姑く階漸を設けて學人のために參禪の一路を示す夫の胡亂に大悟を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち閑はず苟も荆棘林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然たる階梯を辿れ

中原鄧州老師著
大石正巳居士序　飯田欖隱居士跋

南天棒禪話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるか如くにしてしかも慈敎懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底の禪もの縱横に說き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし寡くはまづ聊かこれを試みよ

慶應大學教授
恕滑谷快天先生評釋
和漢

名士參禪集

定價金壹圓
郵稅金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇亀山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家補正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷蘇東坡白樂天張無盡斐休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ

加藤咄堂先生
高島米峯先生
推讃 笛岡清泉先生著

美人禪

定價金一圓
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艶冶の趣ありて想に超脫の旨を存す孰れか禪孰れか戀「美人禪」の一書讀み了りて轉ゝ恍惚たり」と
高島米峯先生曰はく「達磨傾城之圖に參透するの具眼を以てせば始めてこの書一卷別傳の妙敎理不立の好文字たることを看取し色即空なるところに美人の禪を味ふべく空即色なるところに禪の美人と相見すべし」と

建仁寺管長 竹田默雷老師著

禪機

定價金一圓
郵稅金八錢

不言言の妙諦言ひ得て盡さゞるなく不說說の眞源說き得て至らざるなし

高橋竹迷先生著
（口繪、三禪師自讃畫像）

隱元・木庵・即非

定價金一圓
郵稅金八錢

その舌鋒銳利直に人間の皮肉を刺し肺腑を刳る正にこれ眞禪機の暴露

著者今流麗なる筆を呵して夙に黄檗三筆の稱ある隱木即三禪師の哀愁なる生涯頼脫なる言行書畫風流の三味を描寫し以て明朝滅亡史を背景として江戸時代佛敎の活舞臺に躍り出でたる黄檗禪の眞面目を傳ふ蓋し禪界最初の著作たり

臨濟大學教授
文學士 木宮泰彦先生著

榮西禪師

定價金一圓
郵稅金八錢

鎌倉足利時代の文化（文學、建築、繪畫、書道、香道、茶道）は一として當時傳來せる禪宗の影響を蒙らざるはなく殊に我國禪宗の始祖たる榮西禪師の偉業海嶽の如き者あり著者今多年の研究によりてその行狀事業著述及び法嗣の事蹟を詳述し以て鎌倉足利時代の文化を大正の今日に展開し來る單に一禪僧の傳記のみとしてこれを輕々に看過すること勿れ

帝國大學講師
學習院教授 鈴木大拙先生著

禪の研究

定價金一圓
郵稅金八錢

著者嘗に「禪の第一義」を著はして參禪辨道の上に一路の新光明を與へたりしが今やその研究更に百尺竿頭に一歩を進め玆にこの新著を發表して從來の空疎なる談片禪語錄禪の外に別に充實せる系統禪科學禪の存することを明にして修禪の目的人生の歸趣始めてとゝに確立する所以を力說す洵にこれ禪界空前の新研究なり

東洋大學教授 加藤咄堂先生著

劍客禪話

定價金八拾錢
郵稅金八錢

吾等一個の戰士として社會に立つや其の生活は命懸にして其の處世は眞劍勝負なり一歩を過れば喪身失命忽ち人生の劣敗者たらざるを得ず本書は兩刃相交はるの中に秘術を盡すの劍を說くと共に生死岸頭に自在を得るの禪を語る劍客の逸話禪僧の垂示此の劍禪一味のところ直にこれ處世の要訣生活の妙諦事異なりと雖も道は一一讀して趣味全卷に横溢し敎訓綱中に滿つるを覺るべし

曹洞大學教頭 横尾賢宗老師著

生死透脫 禪と武士道

定價金一圓
郵稅金八錢

大和魂は日本國民本具の佛性にして武士道は日本帝國の正法眼藏涅槃妙心なりこの魂とこの道禪爐の熔鑄を經て更に堅牢百錬の鐵の如きを致すこれを以て人若し深厚緻密の風儀を馴致し忠誠奉公の氣象を涵養せむと欲せば須らく武士道を領會し禪理を參究することを要す著者禪門の老碩學一片の婆心此の書を作す所以のもの汎く世人をして禪と武士道とはその骨髓に於て二而不二にして生死透脫の契機實に玆に存するものあることを知らしめむがためなり

西川光次郎先生著
萬病根治

自然療法

定價金壹圓
郵稅金八錢

本書は著者多年の研究により更にリンドラー博士最近の名著『自然療法の理論と應用』を參考として立論せしものにして從來の藥物療法によつて得られず又精神療法によつても得られざる萬病根治の理論と應用とを詳述すると共に健康の維持と回復との最も合理的なる且つ最も道德的なる方法を指示せる名著なり敢て身體虛弱なる人々疾病に惱む人々及び醫界の諸賢の一讀を强請す

東洋大學教授　境野黃洋先生著

八宗綱要講話

正價金貳圓
郵稅金十二錢

佛教各宗の教義を概括して忽逸したるもの古來凝然大德の『八宗綱要』に勝るものなし是を以て佛教學校は各之を教科參考の書となせり境野先生東洋大學に於て本書を講ずること多年今親しく筆を執つてこの講話を著す通俗平易佛教の歷史と佛教の教理とは掌を指すが如く明なり苟も佛教の大要を理解せむと欲する者のためには誠に絕好の師友なり

▲一、原文の外に譯文を加へてこれを上下の二段に對照せしめたる事▲二、難讀の文字には悉く假名を附したる事▲三、重要なる語句は特に摘出して詳解を施したる事▲四、各節の講話は丁寧親切を極めたる事▲五、索引は極めて便利なる佛教辭典の代用をなす事

チャーレス、ゴルハム先生原著
久津見蕨村先生譯

基督教罪惡史

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

邪宗門か眞宗教か文明の進歩を助け人類の幸福を增したる宗教か將又これる妨げて人を虐殺殘害したる宗教か請ふまづ基督教國民の叫びを聽け羅馬以來今日に至るまでの來歷と功罪とは掌を指すが如く法王と教會と異教と異信と新教と舊教と科學と人生と交互參差して爭鬪を極めたる史實宛として人類と宗教と文明との一大パノラマを見るが如し蓋し夫の幸德秋水が生前の遺稿『基督抹殺論』以來の怪著なり

豐山大學長　大僧正　權田雷斧師著

密教綱要

定價金二圓五十錢
郵稅金八錢

本書は東京帝國大學に於ける最初の公開講座の講錄なり由來口訣を重じ面授を尙び堅く神祕の關鑰を鎖して容易に門外の窺靈を許さざりし密教も本書出でゝその本體赤裸々その面目露堂々たり夫の、密教流傳の系統、東密台密の異同、顯密二教の比較、六大四曼三密の祕釋、即身成佛の深義、野澤十二流の分派、灌頂、護摩、加持、新壽、及び阿字觀等の作法と原理、その他凡そ密教の教相と事相とは細大洩すことなく淺深說かざることなし嗚呼此くの如くにして千古の祕藏は玆に遺憾なく開放せられ畢りぬ學界の幸慶何ものかこれに加かむや

328
378

終